令和２年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業

障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイド
―より良い協働と事業成果を高めるためのヒント集―

令和3年3月

特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会

本ガイドは令和２年度障害者芸術文化活動普及支援事業において、平成30年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイドライン作成事業報告書（採択名）」の一環で作成された「障害者芸術文化活動普及支援ガイド」を改訂したものです。

目次

はじめに 3

改訂版作成にあたって 5

1. 本ガイドの概要と構成 7

1.1 本ガイドの作成にあたり大切にしたこと 8

1.2 本ガイドが想定する読み手と活用目的 9

1.3 本ガイドの使い方 10

2. ステップ１：事業計画を作ろう 13

4. ステップ３：事業計画と評価計画に沿って実際に取り組んでみよう 42

5. ステップ４：評価結果をもとに事業を振り返ろう 45

6. 本ステップの報告書作成への活かし方について 50

7. 協働型評価のすすめ 52

8. 活用事例 55

おわりに 59

巻末資料１：障害者芸術文化活動普及支援事業　支援センター活動のコツ（効果的援助要素）チェックリスト 60

巻末資料２：支援センターの活動のコツチェックリスト　レーティング（評点）基準 73

巻末資料３：ステップを確認・整理するためのワークシート 74

巻末資料４：用語集 76

はじめに

本ガイドは、厚生労働省の「障害者芸術文化活動普及支援事業（以下、普及支援事業）[1]」において、都道府県の障害者芸術文化活動支援センター（以下、支援センター）が事業の成果やプロセスを振り返り、そこからの学びを更なる事業改善や、より良い実践に活用していただくことを目的に作成したものです。

本ガイドが対象にする事業は、各都道府県において、障害者の芸術文化活動に関する相談支援、人材育成、関係者のネットワークづくり、情報収集・発信等を行う**普及支援事業の支援センターの事業**としています。本ガイドでは事業の最終目標を「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」と設定し、その実現に至るための成果および活動を構成要素として、振り返りや事業改善に役立つ評価のモデルを紹介しています。

本ガイドの作成過程における支援センター等へのヒアリング調査では、幅広い芸術文化活動の中から「障害者の」芸術文化活動だけを抜き出して考えることへの違和感や、「障害の有無に関わらず、すべての人が芸術文化を享受できることが必要ではないか」といったご指摘もいただきました。これらのご指摘は芸術文化活動を通した共生社会を志向する中では、大変重要な視点だと認識しております。また同時に、本ガイド作成プロセスにおいて、私たちは、芸術文化活動を通した共生社会の実現に向けて、国の施策や枠組みが複数存在していることも理解しました。これらのことから、本ガイドは、普及支援事業が共生社会の実現に向けて、重要な戦略として社会の中に位置づけられていることを改めて整理し、普及支援事業の支援センターに期待されている役割を踏まえ作成したものです。

本ガイドの主な読者は、普及支援事業の支援センター、広域センターや連携事務局、そして普及支援事業を実施している自治体を想定しており、以下の8つの章から構成されています。

まず「1. 本ガイドの概要と構成」の「1.1 本ガイド作成にあたり大切にしたこと」では、皆さんが事業の振り返りに本ガイドを活用する前にご一読いただきたい、本ガイドの「評価」に対する考え方・姿勢を示しています。「1.2 本ガイドが想定する読み手と活用目的」では、活用する主体別に本ガイドを

---

[1] 障害者芸術文化活動普及支援事業とは、障害のある人が芸術文化を享受し、多様な活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人たちの芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することを狙いとしています。平成29年度から実施し、令和２年度は、全国35都道府県が支援センターを開設し、それぞれの支援センターを支援する広域センター、全国を横断的に支援する事務局（連携事務局）も設置しています。（厚生労働省障害者芸術文化普及支援事業パンフレット2020年版より、一部抜粋）関連ウェブページ：http://renkei-sgsm.net/

どう活用できるかについて、記載しています。「1.3 本ガイドの使い方」では、本ガイド活用の4つのステップについてポイントを明記しました。

「2. ステップ1: 事業計画を作ろう」では、支援センターが普及支援事業を通じて目指すべき成果や、それを達成するための道筋（ロジックモデル）を確認し、その成果の達成に向けた活動を紐づけて整理し、事業にどう取り組むか計画します。「3. ステップ2: 評価計画をつくり、成果の達成を測る指標を設定しよう」では、事業実施前に、成果を測定するための指標や到達目標の設定の方法や、データ収集の具体的方法についてまとめています。「4. ステップ3: 事業計画と評価計画に沿って実際に取り組んでみよう」では、事業・活動実施時における事業計画や評価計画の活用の方法について説明しています。そして、「5. ステップ4: 評価結果をもとに事業を振り返ろう」では、評価結果を取りまとめ、そこからの学びを事業改善や今後の事業計画に役立てる方法を概説しています。「6. 本ステップの報告書作成への活かし方について」では、本ガイドを活用して取りまとめた情報を報告書という形で関係者や広く社会へ伝えていく際のポイントを記載しています。「7. 協働型評価のすすめ」では、一連の評価のプロセスや振り返りを協働して行う意義や必要性について述べ、「8. 活用事例」では本ガイドを活用してロジックモデルや事業計画や評価計画を作成した支援センターの事例を紹介しています。[2]

本ガイドでは「評価」を、事業を改善するための手段と位置づけております。このガイドを手に取り読み進めていく中で、今まで「評価」に対して抱いていた「成績づけ」といったイメージと違う印象を持たれる方もいるかもしれません。事業を改善するためには、事業の何が良くて、何が足りないのかといった事業実施のプロセスを評価する視点も必要になります。本ガイドは、普及支援事業の活動と、その結果もたらされる成果との関係を明らかにすることにより、それぞれの支援センターが自らの事業を評価し、より成果を高めていくためのヒント集として作成したものです。各支援センターの現場で実施している内容は多様ですが、ぜひ活用できるところからスタートしていただけたらと思います。普及支援事業という全国型の事業の強みを活用し、評価の視点を日頃の事業活動に組み入れ、各支援センターが行う事業成果の向上にご活用いただけたら幸いです。

なお、本ガイドは全国で厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業（以下、モデル事業とする）」や普及支援事業を行った団体や、普及支援事業を実施している自治体等を対象にした調査結果を検証し、作成したものです。調査結果や作成過程については「障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイドライン作成事業報告書（別冊）」をご参照下さい。

[2] 改訂版作成の目的に合わせ、初版から章とステップの構成を変更しています。詳しくは「改訂版作成にあたって」をご参照下さい。

改訂版作成にあたって

初版のガイドが平成30年度末に完成して以来、令和元年度・令和2年度には全国の支援センターや広域センターを対象としたガイド活用のための研修やワークショップ等を厚生労働省や連携事務局との協働のもと行ってきました。研修やワークショップを重ねる中、多くの方からガイドの活用に向けたご意見やフィードバックをいただきました。これらを振り返る中で、より本ガイドが皆さんにとって活用しやすいものとなり、各支援センターの事業計画の策定や評価に役立つものになることを目的とし、この度ガイドの改訂版の作成に至りました。改訂のポイントは次の4点です。

①業務における活用イメージをより重視した改訂

初版のガイドは、事業実施前⇒事業実施⇒事業実施後の３段階で活用いただけるよう作成したものですが、研修等を通じて大きく２つの課題がみえてきました。１つは、これらの段階がわかりづらく適切なタイミングでガイドを活用いただけていないこと、２つめは、成果を測るための指標や基準を設定するタイミングがわかりづらいことでした。

改訂版では、これらをふまえて、指標や基準を設定するタイミングを新たな段階として位置づけ、活用段階を４つのステップに変更しました。また「事業計画」や「事業実施」、「事業の振り返り」といった支援センターの具体的な業務においてガイドを活用いただけるよう、それぞれのステップが具体的な業務と関連づけられるよう改訂しました。また、必要に応じて活用できるワークシートも紹介しています。

②アウトカムの評価指標や目標値の設定、データの収集方法について具体例を明記

研修やワークショップを通していただいた多くの意見の中には、実際の成果目標が決まっても、生まれた変化や成果をどのように測るかの具体的な方法が知りたいといった声や、指標の設定が難しいという声が多く聞かれました。初版のガイドではステップ3に成果を簡単な方法で調査する、成果を社会調査等の方法を使って評価するという形で例を掲載していましたが、今回の改訂ではより具体的な方法の例示に努めました。

③活用事例の紹介

実際本ガイドに沿う形でロジックモデルを作成している支援センターや、独自でロジックモデルを作成している支援センターで、それぞれロジックのモデルを事業計画や評価計画づくりに活用している団体の活用例を紹介しています。

④用語集の作成

本ガイドに掲載されている、評価や調査に関する専門的な用語や考え方の説明をとりまとめ、巻末資料4に記載しました。ロジックモデルづくりや事業計画づくり、評価計画づくり等のプロセスにおいて、必要時ご参照下さい。

また今回の改訂においては、本ガイドに掲載している支援センターのロジックモデル自体の改訂は見送りました。本ガイドのロジックモデルは平成30年度（ないしはそれ以前）の情報をもとに作成されているものであり、支援センターが国内においても広がる中で、ロジックモデル自体は変化し、皆さんが活用しやすいように変化していくものです。しかし、同時に活用主体の皆さんによる対話や議論も必要であるため、十分な対話や議論を行えていないことから、今回の改訂でのロジックモデルの変更は行わず、今後の検討課題としました。

同時に、活動のコツチェックリスト（効果的援助要素）についても、支援センターの皆さんより、1つのチェック項目に複数の観点が入っていてチェックしにくい等のご意見をいただいておりましたが、支援センター全体のロジックモデルが変わることで、効果的な活動のコツも変化するため、今回の改訂では細かな調整は行わないこととしました。

本改訂版が支援センターとしての事業をより良いものとし、評価や振り返りを用いて、普及支援事業における価値創造に貢献できるものとなれば幸いです。

1. 本ガイドの概要と構成

本ガイドが対象とする事業は、各都道府県において、障害者の芸術文化活動に関する相談支援、人材育成、関係者のネットワークづくり、情報収集・発信等を行う厚生労働省の普及支援事業の中の支援センターの事業です。本ガイドでは、支援センターの事業の最終目標を「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」こととし、各支援センター等がこの目標に基づいて、活動の状況を振り返り、そこからの学びを事業の改善や計画作りに活用し、事業成果を評価する具体的な手順・方法をまとめています。本セクションでは、本ガイド作成にあたり大切にしたこと、読み手別のガイドの活用方法について説明し、評価のステップごとに本ガイドの使い方を説明します。

1.1 本ガイドの作成にあたり大切にしたこと

本ガイドを作成するにあたり、私たちが大切にしたことが２つあります。

まず１つめは、事業の成果だけを振り返りの対象とするのでなく、活動のプロセスを含めて振り返りを行い、そこからの学びを事業改善や計画作りに役立てることをガイドに組み込んだことです。「何をどれくらいした」、「何にどれくらい来た」、「何をどれくらい売った」ということが意味することは、事業の「結果」であり「成果」ではありません。結果（事実）を確実に把握することは、非常に重要ですが、それが果たして多かったのか、少なかったのか、あるいはそれがどのような成果に結びついたのか、ということは、例えば初めて活動をする支援センターと、すでに複数年度行ってきた支援センターとでは当然異なります。他にも人や資金といったリソースや、普及支援事業が行われる以前に、地域で障害者の芸術文化活動を支えていた実績があること等によっても異なってくるでしょう。それぞれの文脈の中で、**事業が生み出したものに価値を付与することが、「評価」の本質です。**

事業の成果を評価するにあたり大切なことは、事業の成果目標を明らかにし、**成果につながる活動を行っていたか（活動を通して成果を志向できていたか）**ということであり、それは事業を「計画」するところから始まります。計画の段階で成果やもたらしたい変化を考え、適切な活動計画を検討することなしに、望ましい成果は生まれません。そのため、**計画の評価**も重要になります。今回のガイドを活用して、「立てた計画は実行できたか」「計画をどのように実行したのか」「事業はどのような変化を生んだのか」「うまくいかなかった場合は、何が原因だったのか」という問いを立てながら、このプロセスからの学びを次の計画立案や事業改善に役立てていただきたいと考えます。本ガイドを手に取られたとき、すでに事業のサイクルが回り始めているかもしれません。そんなときも、「計画した活動は、どのような成果や変化を志向して立案したものだったのか」というところに立ち返り、それが普及支援事業の成果とつながらない場合は、可能な範囲で計画の変更を行うことをお勧めします。

本ガイドの作成にあたり大切にしたことの２つめは、本ガイドが活動方法の画一化を目指すものではないということです。「2.ステップ1：事業計画を作ろう」のロジックモデルの中にある活動には、各支援センターが**地域のコーディネーター**として、障害者の芸術文化活動に関する情報発信、総合的な相談対応、人材育成等を行う支援拠点の役割を担いながら、「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」という成果を目指すときに、支援センターの事業として標準的に必要な項目を書い

ています。これは、平成30年度に支援センターの現場で行われている活動を体系化して整理した結果生まれたものですが、本ガイドは、**それぞれの「活動方法」を「画一化」することを目的にはしていません。**活動を「どう行うのか」の方法の部分は、地域性や各支援センターの強みや、利用可能なリソースの量により左右されるものでもあります。それぞれの支援センターの創意工夫によって成果を生み出した事業に、普及支援事業の目的を達成するヒントがあるかもしれませんので、実践を言語化し可視化する第1歩として本ガイドを利用していただき、各地域の多様な主体と一緒に吟味し、振り返りや成果評価を行っていただけたらと思います。

1.2 本ガイドが想定する読み手と活用目的

本ガイドの主な読者は、普及支援事業の支援センターや広域センター、連携事務局、そして普及支援事業を実施している自治体を想定していますが、それぞれの立場において、以下のように役立てていただけると考えています。

支援センター

- 本ガイドで述べているロジックモデルや成果をもたらす活動のコツのリストを利用して、各支援センターの事業計画づくりや評価、活動の振り返り、そしてそのプロセスから学んだことを事業改善に結びつけることができます。
- 自治体や他の支援センター、広域センター、連携事務局等と振り返りの内容を共有することで、協働をしながら一緒に事業の成果を高めていくことができます。
- 団体の規模やリソースに応じて、可能な成果の測定方法を検討することができます。

広域センター・連携事務局

- 支援センターがロジックモデルにある共通の成果目標を参考にしながら活動や評価を行える環境になるため、支援センターが課題を抱えている部分や、より伸ばしたいと思う部分について把握、必要なサポートを検討することができます。
- コーホート（共通した背景でグループ化した集団）別のデータを取ることが可能であるため、普及支援事業の成長段階や特徴に応じて、より効果的な支援のあり方を普及支援事業に関係する主体と一緒に考えるヒントを得ることができます。また普及支援事業未実施自治体へのアプローチにも役立てることができます。

自治体

- 普及支援事業が目指す成果を志向した事業計画の策定や運営を行い、地域の実情や文脈に沿った活動を支援センターと一緒に振り返り、評価することができます。
- 各自治体にとって芸術文化活動を通した障害者の社会参加を実現するために、必要な施策や連携とは何かについて考えることができます。
- 普及支援事業のゴールや生み出そうとしている成果と、それを志向する活動であることを常に念頭におくことで、共通の評価軸で支援センターや関係者と成果評価を行うことができます。

以上は、代表的な活用のあり方を示したもので、本ガイドの活用方法は上記に限るものではありません。本ガイドを使っていただきながら、様々な活用の仕方もご検討いただけたら幸いです。

1.3 本ガイドの使い方

本ガイドでは、より良い協働と事業成果を高めるための評価のプロセスを、以下の4つのステップに分けて行います。

ステップ1：事業計画を作ろう
ステップ2：評価計画をつくり、成果の達成を測る指標を設定しよう
ステップ3：事業計画と評価計画に沿って実際に取り組んでみよう
ステップ4：評価結果をもとに事業を振り返ろう

一般的に「評価」は、「活動や事業の後に行うもの」とイメージされることが多いかもしれません。しかし、本章の冒頭でもお話したとおり、事業の成果を高めるためには、その成果の向上に資する活動を計画できているか、皆さんの事業が何を目指しているのかという成果目標の確認・認識が重要です。そのために活用できる有効な方法が「評価」です。そのため、本ガイドでは事業実施後に評価やふりかえりをする**前**に踏むべきステップとして、ステップ１と２を据えています。

ステップ1では、まず普及支援事業が「何を目指しているのか」、言い換えれば普及支援事業の目指すべき成果を支援センターが認識し、そこに至る道筋の中に支援センターの活動や事業を位置付け、実施のための事業計画を作成します。初版のガイド作成の過程で、支援センターの基本的なロジックモデル（事業設計図）を作成しました（平成30年3月に行った普及支援事業の第3回全国連絡会議におい

て、支援センター等を対象に行ったロジックモデル研修[3]や、支援センターの活動報告書の分析、支援センター等へのヒアリングやアンケート調査、有識者・専門家の方のご意見等を元に、整理・構造化して作成したものです）。このロジックモデルと皆さんの事業や計画、ないしは皆さんが作成しているロジックモデルを比較することで、皆さんの活動や計画をチェックすることが可能です。ロジックモデルは、事業や組織が最終的に目指す変化・成果の実現に向けて、道筋を体系的に図示化したものです。ロジックモデルを活用すると、最終的に目指すゴールからさかのぼり、自分たちの事業の対象者に、どのような変化がもたらされると、そのゴールがより達成しやすくなるのか、そしてその実現のために、支援センターの事業内容をどのように行うのが良いのかを確認することができます。成果を生み出す活動を確認したら、その活動を支援センターの事業計画に組み込みます。

成果に繋がり得る活動や事業の計画を一から考えることが難しい場合に備え、本ガイドでは、すでに支援センターへのアンケートを通して、「どのような活動のコツが、活動を充実させて成果をもたらしているのか」ということを確認しており、それらをもとに、支援センターの皆さんに参照していただける、活動のコツのリストを作成しました。（この「活動のコツ」を専門用語では「効果的援助要素」と呼んでいます）。事業計画の作成の際はこちらも参考にしていただけます。

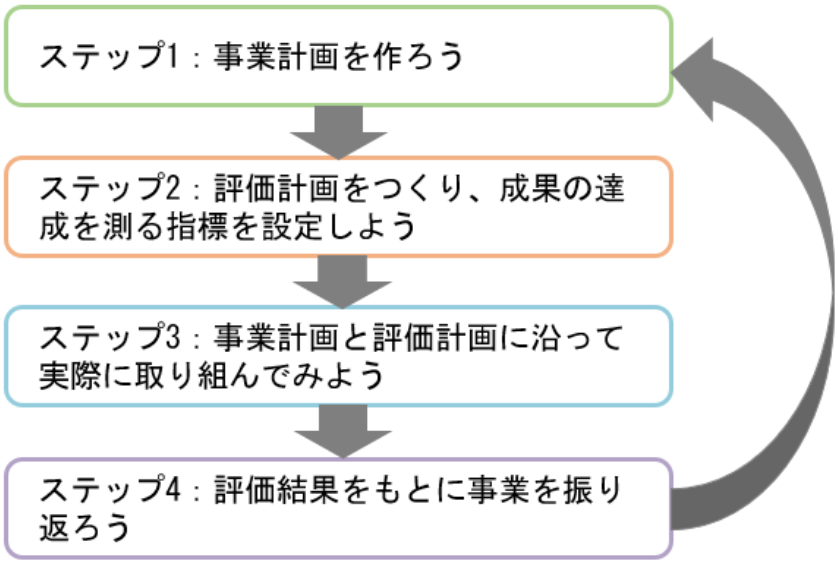
ステップ2では、ステップ1で皆さんが作成した事業計画に基づいて事業を実施した結果、望んだ成果や変化の達成に結び付いたか、または近づいたのかということを事業実施後に評価できるように、予め「何でその成果や変化を測るのか（指標の設定）」、「どのような状態になっていれば支援センターとして成果の達成に至ったといえるのか（目標値・目標状態の設定）」、「その判断をするためにどのようなデータを取るのか（データの収集方法）」等を整理し、まとめておく評価計画を作成します。

ステップ3では、ステップ1で作成した事業計画とステップ2で作成した評価計画を参照しながら、実際に事業を実施します。実際の活動では、いくら活動計画を精緻に作成したとしても、社会的な状況や予期せぬ出来事等によって、計画が思いどおりに進まないことも多々あるかと思います。本ガイドのステップ3においては、2つの計画に基づいて事業を進めていく際のポイントについて概説しています。

ステップ4では、事業計画に沿って事業を実施し、評価計画に基づいて評価を行った結果を確認し、今後に向けた振り返りを実施します。具体的には、事業の良かった点（達成できた成果）や改善点（今後の展望）を関係者と振り返り、評価結果を次の事業計画に活かすというプロセスになります。図表1に各ステップの関係を図示します。

[3] 詳細は「平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業報告書」p.59を参照

図表1　各ステップの関係



また、上記のステップ1から4のプロセスをまとめていく際に、支援センターの皆さんに活用いただける「ステップを確認・整理するためのワークシート」とその使い方を巻末資料3に掲載しました。支援センターにおいては、事業計画や評価計画、または報告書等を独自もしくは指定の書式で作成されているかと思います。その際、必要となる情報を本ワークシートに集約しておくことで、作成する書類や報告の目的等によって情報を選びながら活用いただくことができるかと思いますので、必要に応じてご活用下さい。

2. ステップ１：事業計画を作ろう

《このステップで行うこと》

①ロジックモデルを使って支援センターの目指すべき成果目標を確認する

②成果目標を達成するために必要な活動や資源を検討する

③①&②で整理した情報を事業計画にまとめる

ステップ1では、普及支援事業の目的や、もたらすべき成果が何なのかということを確認し、その成果の達成に向けた道筋を、ロジックモデルを使って整理し、事業計画を作成します。

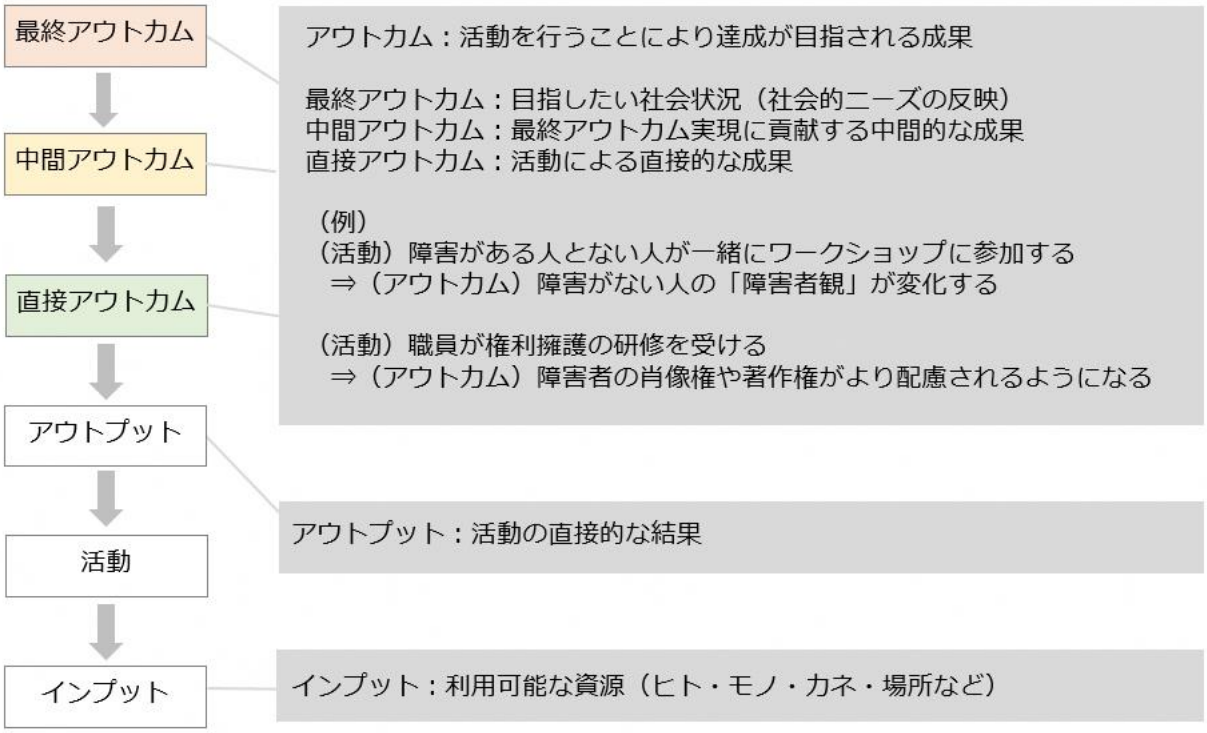
① ロジックモデルを使って支援センターの目指すべき成果目標を確認する

1）ロジックモデルとは

ロジックモデルとは、事業の設計図・戦略図とも呼ばれ、最終アウトカムを見据え、そのために必要な変化を起こしていくためには、どのような資源（インプット）を投入すればいいか、活動や実施体制を踏まえて、どのような事業を実施すればいいか（活動）、その直接的な結果（アウトプット）がどれくらいあれば、成果や変化（直接・中間アウトカム）を生めるのかということを体系的に図式化し、整理することに役立つツールです。以下にロジックモデルの概要図（図表2）があります。

（改ページ）

図表2ロジックモデルの概要



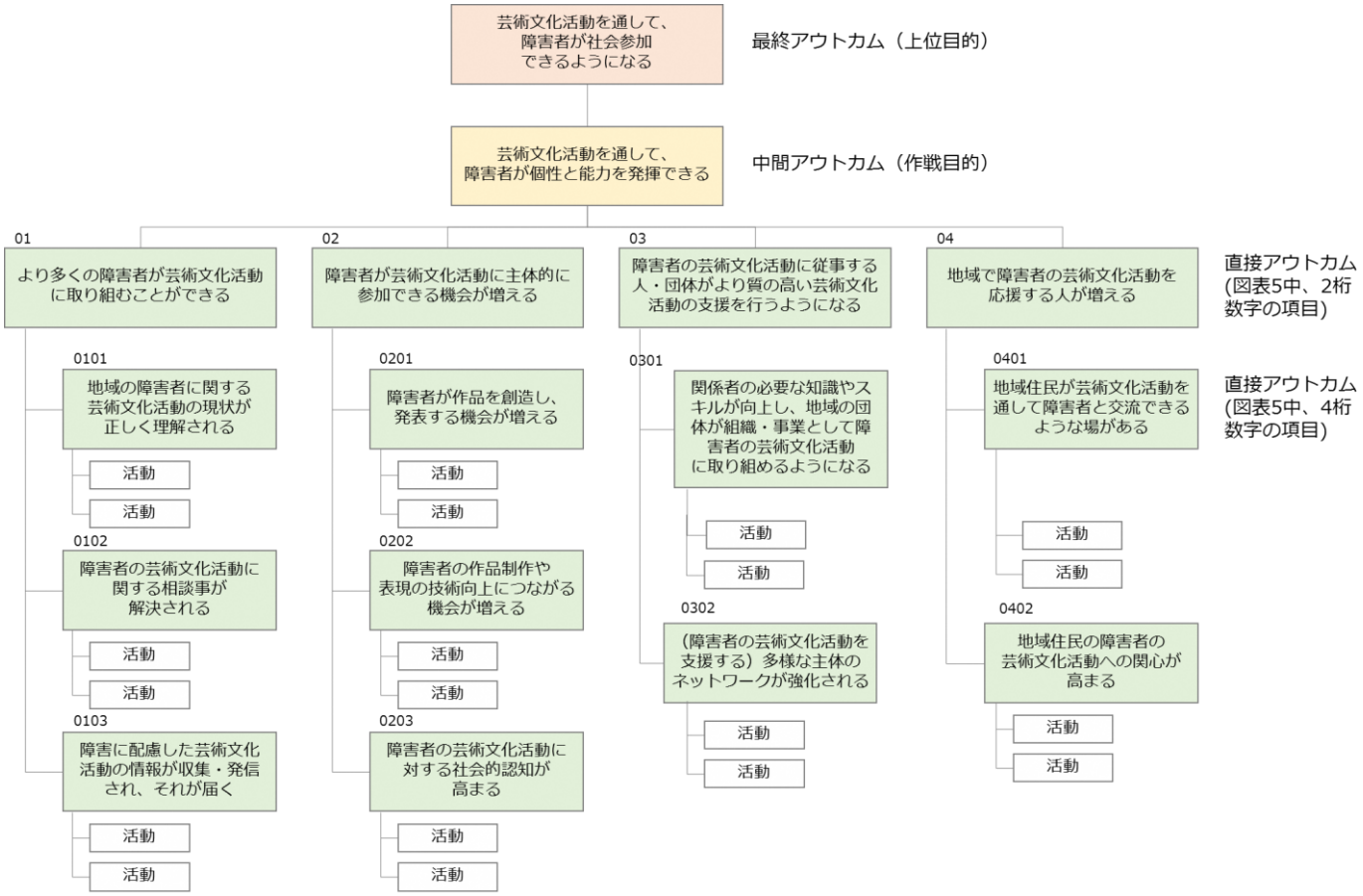
2)普及支援事業におけるロジックモデル

本ガイド作成においては、普及支援事業の中でも「支援センター」の取り組みに注目し、「最終的に目指す目的やそのために達成すべき成果は何か」や「目的の達成に必要と考えられる活動は何か」を分かりやすく整理するために、平成30年度に「支援センター」のロジックモデルの作成を行いました。そして、「支援センター」が目指す最終アウトカムとして「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」と設定し、そして、最終アウトカムを達成するために必要な中間アウトカムとして「芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる」と設定しました。

この2つのアウトカムの達成を目指すための、細分化されたアウトカムとして「より多くの障害者が芸術文化活動に取り組むことができる（O1）」「障害者が芸術文化活動に主体的に参加できる機会が増える（O2）」「障害者の芸術文化活動に従事する人・団体（関係者）がより質の高い芸術文化活動の支援を行うようになる（O3）」「地域に障害者の芸術文化活動を応援する人が増える（O4）」の4つの直接アウトカムを設定し、それぞれの項目の下に、さらに詳細なアウトカムと、そのアウトカムを生み出す活動を設定しました（ガイド作成のプロセスや詳細については、別冊の「障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイドライン作成事業報告書」をご参照下さい）。

上記の形式を活用し、支援センターのロジックモデルを描くと、図表3のようになります。上から、最終アウトカム、中間アウトカム、直接アウトカムを描いており、さらにその下には、各直接アウトカムにつながる実際の活動を示しています（図中では詳細について省略しますが、各アウトカム項目に対応する活動をすべて示したものを、図表4に表バージョンのロジックモデルとして示しています）。

図表3　支援センターのロジックモデル（活動部分は省略）



（改ページ）

図表4　支援センターのロジックモデル（表バージョン）

事業の作戦体系図（ロジックモデル）			
最終アウトカム（上位目的）			芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる
中間アウトカム（作戦目的）			芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる
01	より多くの障害者が芸術文化活動に取り組むことができる		
	0101	地域の障害者に関する芸術文化活動の現状が正しく理解される	
		010101	地域の障害者の芸術文化活動について網羅的なアンケート調査を実施する
		010102	地域の障害者の芸術文化活動について訪問による詳細な調査を実施する
		010103	障害者の芸術文化活動に関する既存の調査結果を参照する
	0102	障害者の芸術文化活動に関する相談事が解決される	
		010201	支援センターに障害者が相談しやすい環境を整備する
		010202	多様な通信手段で相談を受け付ける
		010203	相談の内容に応じて、関係機関の紹介を行う
	0103	障害に配慮した芸術文化活動の情報が収集・発信され、それが届く	
		010301	様々な機関・団体から芸術文化活動に関する情報を得る
		010302	障害者にも分かりやすい伝え方で、芸術文化活動についての情報提供を行う
02	障害者が芸術文化活動に主体的に参加できる機会が増える		
	0201	障害者が作品を創造し、発表する機会が増える	
		020101	障害者の作品や障害のある芸術家を調査・発掘する
		020102	地域の障害者による作品や芸術文化活動のアーカイブ（記録及び保存）のための活動を行う
		020103	障害種別を問わず、参加可能な芸術文化活動の環境整備を支援する
		020104	展覧会や舞台公演等の機会を創出する
	0202	障害者の作品制作や表現の技術向上につながる機会が増える	
		020201	障害者のニーズに合わせ、芸術文化活動を学べる場等、適切な情報提供を行う
		020202	障害者福祉施設や学校、地域の文化施設等において、障害者が芸術文化活動に参加・体験できるよう支援する
	0203	障害者の芸術文化活動に対する社会的認知が高まる	
		020301	展覧会や舞台公演等を積極的に開催している
		020302	障害者の作品をレンタル、あるいは販売する
		020303	多様なメディアを活用し、障害者の芸術文化活動を紹介する
03	障害者の芸術文化活動に従事する人・団体（関係者）がより質の高い芸術文化活動の支援を行うようになる		
	0301	関係者の必要な知識やスキルが向上し、地域の団体が組織・事業として障害者の芸術文化活動に取り組めるようになる	
		030101	関係者に障害者の芸術文化活動支援に必要な研修会・勉強会を行う
		030102	障害者の芸術文化活動支援に関する成功事例・失敗事例やノウハウ等をテーマ別に蓄積し、発信する
		030103	障害者と関係者がともに芸術文化活動の企画を行う
	0302	（障害者の芸術文化活動を支援する）多様な主体のネットワークが強化される	
		030201	様々な機関・専門家が参加した協力委員会等の協力体制を整え、このネットワークを活かした支援を行う
		030202	様々なネットワークを活かし、障害者の芸術文化活動支援を行う
		030203	障害者の芸術文化活動に関わる行政の担当部署や担当者と定期的に情報交換を行う
		030204	必要に応じて、法律専門家や芸術活動専門家の協力を得る
04	地域で障害者の芸術文化活動を応援する人が増える		
	0401	地域住民が芸術文化活動を通して障害者と交流できるような場がある	
		040101	地域住民が障害者の芸術文化活動に触れられるような多様な機会（イベント・ワークショップ）をつくる
		040102	地域住民が障害者の芸術文化を参加型で一緒に楽しむ機会を創出する
		040103	地域住民が障害者の芸術文化を参加型で一緒に楽しむ機会を、地域の団体が創出できるよう支援する
	0402	地域住民の障害者の芸術文化活動への関心が高まる	
		040201	支援センターについて知ってもらうためのリーフレットやウェブサイトを準備し、広報を行う
		040202	必要に応じて、障害者の芸術文化活動についてのチラシ等を作成し、地域住民向けに配布する
		040203	障害者の芸術文化活動について紹介するウェブサイトを準備し、地域住民向けに公開する
		040204	チラシやウェブサイト等の広報媒体は，デザイナーや制作会社に協力を依頼する等して、作成する
		040205	地域住民が障害者の芸術文化活動に触れられる多様な機会（イベント・ワークショップ・アーカイブ）についての情報を発信する

例えば、「03：障害者の芸術文化活動に従事する人・団体（以下、関係者）がより質の高い芸術活動の支援を行うようになる」に着目してみましょう。このアウトカムを達成するためには、その下位に属している「0301: 関係者の芸術文化活動支援に関する知識やスキルが向上する」という、より具体的なアウトカムがあり、それを達成するための活動の1つとして「030101:関係者に障害者の芸術文化活動支援に必要な研修会・勉強会を行う」という活動を据えています。030101のような6桁の数字とともに記されているものが成果につながる活動であり、どれか1つを行えば良いというわけではなく、

4桁のアウトカムを達成するためには、基本的にすべての要素が必要だと考えられています。また4桁と2桁のアウトカム、2桁のアウトカムと中間・最終アウトカムとの関係性も同様で、ロジックとしてはこの中の何か1つだけできれば良いというわけではなく、基本的に6桁の活動すべてが最終アウトカムの達成に向けての重要な要素となります。

このように、アウトカムと活動を直接的に紐づけて考えることで、活動（手段）を行うことが事業の目的となることを防ぎ、どのような活動を行えば、どのような成果が創出されるのか、あるいはどのような成果創出を目指すための活動なのかを考え、事業の作戦・計画を立てることが可能となります。

また、ロジックモデルを活用するにあたり、いくつかのメリットと注意点について以下の図表5にまとめました。ロジックモデルは、あくまで事業をより良く進めるために活用する、コミュニケーションツールです。地域、自らの事業にとって良い形となるように、うまく活用しましょう。

図表5　支援センターのロジックモデル活用におけるメリットと注意点

メリット	・　支援センターとして目指すべき方向性を把握し、どのような活動を実施すれば良いのか整理にすることができる。 ・　事業の全体像を把握することで、事業の改善に活用することができる。 ・　複数の関係者と、事業の目指すべき方向性について対話をするための、コミュニケーションツールとして活用することができる。
注意点	・　地域や自身の事業にとって重要な点から優先的に取り組むものであり、義務的にすべてのアウトカム項目の達成や、すべての活動の実施を強要するものではない。 ・　「良し悪し」を判断するためのものではなく、事業の改善に活用するためのものである。 ・　ロジックモデルで構造化されている成果達成への道筋は仮説であり、固定されているものではない。モニタリングや評価の結果を反映させて、常に改善されるべきものであり、成果を生み出すプロセスを改善し、精度を上げていくことが必要である。

3)事業計画づくりにおけるロジックモデルの活用方法について

本ガイドの活用に向けた研修やワークショップ等をすすめていく中で、本ガイドで提示しているアウトカムを踏襲しながらロジックモデルを作成したり、事業計画作成に活かしたりしている支援センターが認められるほか、独自にアウトカムを設定してロジックモデルの作成を行っている支援センターの試みも明らかになりました。本ガイドのステップ1では、本ガイドのアウトカムを踏襲しながらロジックモデルを作成する方法を「パターン1」、独自のアウトカムを設定してロジックモデルを作成する方法を「パターン2」として位置付け、以後、その方法について概説します。

【パターン1：本ガイドのアウトカムを踏襲しながらロジックモデルを作成する】

本ガイドのアウトカムを踏襲しながらロジックモデルを作成する場合は、例えば令和2年度の一部のブロック研修・ワークショップ等で実施したように、ロジックモデルの4桁のアウトカムを本ガイドから活用し、それに紐づく活動を各支援センターが検討・計画するという方法で作成することが可能です。

【パターン2：独自のアウトカムを設定する】

パターン1の方法以外に、前述のロジックモデルの概説をもとに、各支援センターが独自にアウトカムを設定し、ロジックモデルを作成することも可能です。独自でアウトカムを設定する場合は、以下の2点がポイントになります。1つめは、**「アウトカムの主語を明確にして表現する」**という点です。例えば、「障害者の芸術文化活動に関する相談事**が**解決される」「障害者の芸術文化活動を支援する人たち**が**地域に増える」といったように、誰のどんな変化を目指すのかを明確にします。

2つめは、**「「すること」ではなく「状態像」を書く」**ということです。アウトカムとは目指すべき状態像や変化の状態を指す言葉ですので、例えば「～が理解されている、～が増える、～が高まる、できるようになる」という表現にするのがポイントです。

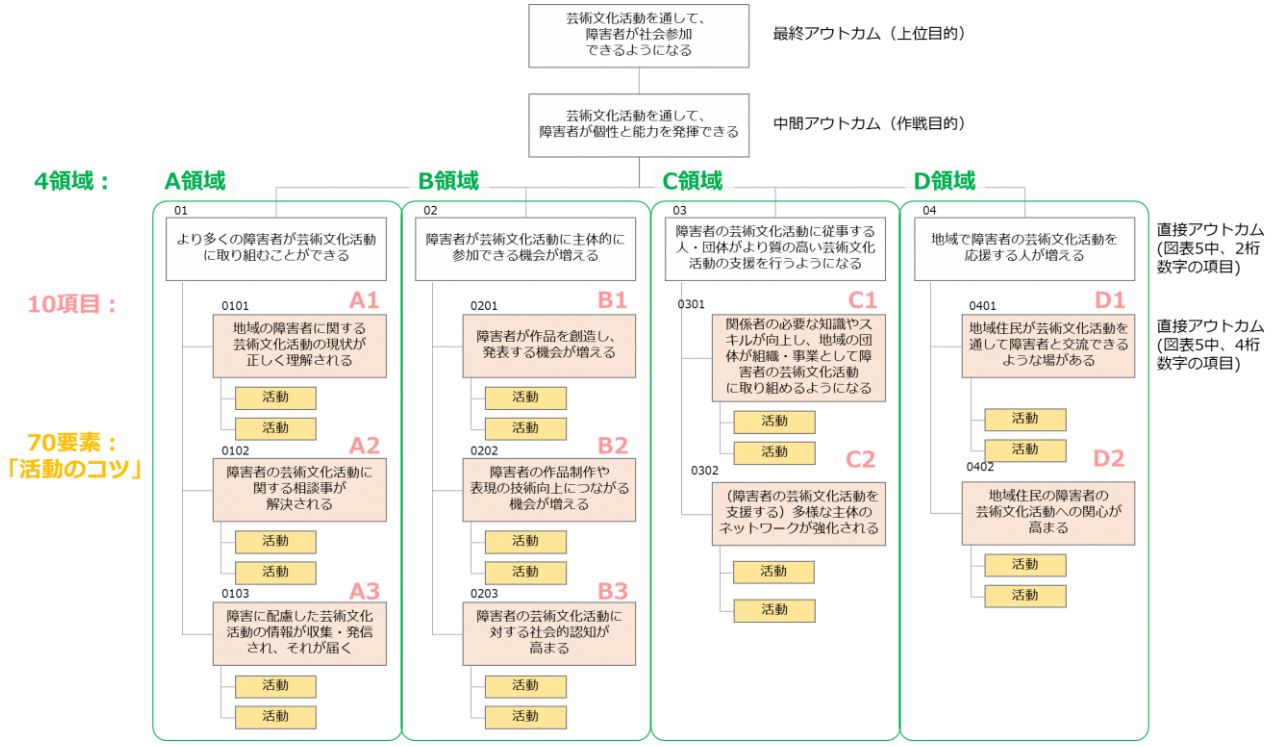
②成果目標を達成するために必要な活動や資源を検討する

前項の「パターン1」ないし「パターン2」でロジックモデルを使って、支援センターが目指すべき成果目標が明らかになったら、その達成手段として必要な活動や資源（インプット）を検討します。「パターン1」のように目指す成果目標が支援センターに共通だとしても、各都道府県における課題や、地域資源等によって活動の内容は異なってくることがあると思います。例えば、「0101: 地域の障害者に関する芸術文化活動の現状が正しく理解される」という目標を達成するために、支援センターが地域の障害者芸術文化活動に関する調査を実施するとします。長年支援センターを運営してきた都道府県のセンターには、その間溜まったデータがあり、それに基づいて「今年度はどの分野に注力して調査をしよう」と決めることができますが、初めて支援センターを開設する都道府県で過去に調査データがない場合は、まず全体像を把握するための調査が必要なる場合があります。それぞれの調査対象、調査範囲、それに係る費用や時間等も自然と異なってきますので、手段としての活動を考える際には、併せてその活動に必要な人材や費用等のインプットを合わせて検討することで、無理のない活動計画を作成することができます。

また、「パターン1」で成果目標を設定する際、アウトカムと活動の繋がりを具体的にイメージにしにくい場合は、本ガイド巻末資料1に記載している活動のコツを参照しながら、活動を検討することも可能です。本ガイドでは、平成３０年度に支援センターやモデル事業を行った経験のある団体に行った調査をもとに、普及支援事業の成果の達成を目指す上で重要となる実施要素（成果の達成につながる活動の詳細）を活動のコツ（効果的援助要素）として位置づけ、リストにしています。このリストにある

個別の活動は、検証の結果、ほぼすべての領域において目指すべき成果の達成に貢献するものであることが証明されています[4]。各支援センターが事業を計画する際に、まずこの活動のコツ（効果的援助要素）に載っている方法を取り入れているかどうかについて確認してみて下さい。なお、このリストは4領域、10項目、70要素から構成されています。「領域A～D」はロジックモデルの直接アウトカム以下を、「項目」は各領域の細分化されたアウトカムを、そして「要素」は各項目の「活動のコツ」（効果的援助要素）を意味します。それぞれの関係性は図表6に示すとおりです。

図表6　重要となる実施要素のリスト構成（4領域、10項目、70要素）



各10項目に紐づく70の活動のコツリストについては、巻末資料１の「障害者芸術文化活動普及支援事業　支援センター活動のコツ（効果的援助要素）チェックリスト」をご参照下さい。

③①～②で整理した情報を事業計画にまとめる

ロジックモデルを活用して目指すべき成果を明確にし、その成果目標に照らして活動を整理した情報は、そのまま事業計画づくりや、「ステップ2:評価計画をつくり、成果の達成を測る指標を設定しよう」にも役立ちます。皆さんがロジックモデルづくりを通して設定したアウトカムが「成果目標」と同

[4] 検証のプロセスや結果については「障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイドライン作成事業報告書」をご参照下さい。

義になりますので、まずそれらを書き出してみると良いでしょう。また、「成果目標」は皆さんにとって事業の「目的」や「ねらい」というように解釈することもできるかもしれません。

これらの成果目標・目的・ねらいなどを明らかにしたら、今度はその目標を達成するための手段とし活動を計画します。活動は関係する成果目標に紐づけて検討します。例えば、皆さんが「地域の障害者に関する芸術文化活動の現状が正しく理解されるようになる」という成果目標を設定したとします。その場合、それを達成するための活動として、「●●県内における障害者へ芸術文化活動の機会を提供している施設・団体の調査」「芸術文化活動に関わる当事者や支援者へのヒアリング調査」というような具体的な事業内容を計画します。

また、「成果目標」とそれを達成するための「活動」を計画したら、同成果目標の「目標達成時期」や各活動の「体制」・「スケジュール」についても具体的に計画しておくとよいでしょう。

3. ステップ２：評価計画をつくり、成果の達成を測る指標を設定しよう

《このステップで行うこと》

①事業計画に記載した成果の指標＆その到達点（目標値・目標状態）を考える

②事業計画に記載した活動の指標を考える

③①＆②の把握方法及び時期を考える

④①～③を評価計画にまとめる

ステップ1では、本支援ガイドで提示しているロジックモデルを参考に、あるいは事業実施者である皆さんが独自に設定した目標・活動をもとにして事業計画を作成しました。

ステップ2では、この事業計画に対応した形で**「評価計画」の作成**を行います。そのための具体的な作業例は次のとおりです。

①事業計画に記載した成果の指標＆その到達点（目標値・目標状態）を考える

ここではまず、皆さんが事業計画に記載した成果目標を測定するための指標とその到達点（目標値・目標状態）を考えます。

例えば、本ガイドで提示しているロジックモデルの最終成果は「芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる」となっており、中間成果は「芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる」となっています。

しかし、ここでの「障害者」とはどのような人を意味するのでしょうか。ある人は「福祉サービスを利用している障害者のこと」を想定し、別の人は「（支援センターが対象とする）地域で生活する障害者全員」を想定するかもしれません。おそらく「個性と能力の発揮」についても人それぞれに想定することが違うということが生じ得るでしょう。

さらに、これらの成果はどのあたりまで達成されれば「事業の成果は十分であった」と判断できるでしょうか。あらかじめ事業の成否を判断するための基準が設定されていなければ事業の成果を判断することはできません。

そこで、事業の「成果」を測定するための**具体的な「指標」とその成否を判断するための「到達点（目標値・目標状態）」が必要**になります。ステップ1は成果目標とそれに紐づく活動等を整理しました。ステップ2ではまず、それぞれの成果に「指標」を設定し、次に「目標の達成を判断する基準」を設定

します。

なお、指標及び目標の達成を判断する基準の設定にあたっては以下の点に注意しましょう。

- 成果に指標を設定する作業は、達成を目指す「価値」を具体化させる作業と同様です。事業実施者である皆さんは具体的に**「何を達成することに価値を置くのか」**を考えながら指標を設定してみて下さい。
- 定量的な指標（例えば〇人等）を設定しづらい場合は定性的な指標（例えば障害者の意見等）の設定でも構いません（ただ、その場合でも「～という意見が聞かれる」等目標の達成を判断できる基準を設定しましょう）。図表7にいくつかの指標例を挙げていますので参考にしてみて下さい（あくまでも例であり、これに限るものではありません）。

図表7　成果指標と目標の達成を判断する基準の例

■　～からの相談数（指標）が、●●程度増える（基準）
■　～相談の解決率（指標）が〇〇%になる（基準）
■　～研修参加者の理解度（指標）が、▲▲程度深まる（基準）
■　～の地域での認知度（指標）が、◇◇程度増える（基準）
■　～が把握されている状態（指標）が、xx程度進む（基準）
■　～の状態（指標）について、■■という状況が見られる（基準）

②事業計画に記載した活動の指標を考える

さて、成果指標や到達点（目標値・目標状態）はうまく設定できたでしょうか。次に重要なことは成果を達成するための「活動」を評価するための指標です。

成果指標や到達点（目標値）が設定でき、事業の成果を評価できるようになったとして、活動の実施状況が正確にわからなければどうでしょう。達成された成果が本当に事業実施によってもたらされたものなのかがわかりません。あるいは、成果が期待したほど達成できなかった場合はどうでしょうか。活動の実施状況が正確にわからなければ、活動のどこをどう改善すれば良いのかがわかりません。そこで、次に事業の「活動」を測定するための具体的な「指標」を設定します。そして、指標の設定が済んだら「目標とする基準」を設定してみましょう。

なお、指標及び目標とする基準の設定にあたっては以下の点に注意をしましょう。

- 指標の設定にあたっては必ずしも一つ一つの活動に対して一つずつ指標を設定する必要はありません。

- いくつもある活動の中から**より重要な活動を取り上げ、この活動を中心に指標設定**し（これをKPI：Key Performance Indicatorといいます）評価する方法、あるいは**活動群をひとまとめにして「十分に実施されたかどうか」を振り返る**方法等があります。
- 目標とする基準を設定する際は、「ここまで活動を実施することができれば、成果の達成が十分に期待できるだろう」という基準を考えます。
- 設定に当たっては図表8の例を参考にしてみて下さい。

図表8　活動の指標と目標とする基準の例

事業計画に記載した活動	活動の指標	目標とする基準
1-1. 関係者に障害者の芸術活動支援に必要な研修会・勉強会を行う 1-2. 障害者と関係者がともに芸術文化活動の企画を行う	1-1. 研修の実施回数 1-1 & 1-2. これらの活動が十分に実施できたか（スタッフの認識）	1-1. 年間〇回 1-1 & 1-2. 支援センターのスタッフ全員が「十分に実施できた」と評価している
2-1. 必要に応じて、障害者の芸術文化活動についてのチラシ等を作成し、地域住民向けに配布する	2-1. 配布したチラシの枚数	2-1. 〇枚

また、①で述べた成果目標の指標や②で説明してきた活動の指標については、本ガイドだけでなく、すでに評価に取り組んでいる支援センターから知見を学ぶことができます。例えば、Saga ArtBrut Network Center(SANC)は、令和元年度の報告書[5]に支援センターとして自ら立てたロジックモデルを評価結果とともに公開し、アウトプット指標に基づいた評価結果を報告しています。また、アウトカムについても、セミナー参加者や展覧会実行委員会へ支援センターが目指した変化を感じているかどうかを調査した結果を報告しています。成果評価は必ずしも社会調査等の複雑な方法を伴うものだけではなく、皆さんにとって負担の少ない簡易な方法や、実現可能な方法で実施していくことが重要であり、他の支援センターがどのような基準でデータを集め、判断軸を持っているかということをお互いに学ぶことが、評価を事業活動の中に取り込んでいく上での近道といえるかもしれません。

③①&②の把握方法及び時期を考える

さて、活動の指標や目標とする基準を設定できたでしょうか。次は成果指標や活動の指標に対して具体的にデータを収集する方法やその時期を検討します。

[5] SAGA ART BRUT NETWORK 2019-2020 令和1年度　佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業　報告書

成果指標や活動の指標、そしてこれらの到達点（目標値）を設定できたとして、これらの評価を行うためには確実にこれらのデータを収集しておく必要があります。また、データ収集方法として次のような方法が考えられます。

- アンケート調査（郵送法、留め置き法等）
- インタビュー調査（個別インタビュー、グループインタビュー等）
- 観察（参与観察、非参与観察等）
- 事業実施上、自然と得られるデータの収集（例えば、イベントへの参加者数等）
- パネル調査（調査対象者を固定化し、複数時点において調査を繰り返す方法）

現場で業務が多忙になると、例えばシンポジウムやワークショップの参加者に「障害者芸術文化活動への理解の深まり」を聞きたいと計画時点で考えていたとしても、アンケートを取り忘れてしまったというようなことは起こり得ることです。「データ収集方法」や「データを収集する時期」をあらかじめ具体的に書き出しておくことでデータ取集をし忘れてしまうことを防ぐことができます。

なお、データの収集方法及び時期の設定にあたっては下記の点に注意をしましょう。

- 様々な調査法のメリット・デメリットを理解し、収集したいデータに適した方法を選択しましょう。
- 調査（データ収集）時期も収集しようとするデータに適した時期を設定するようにしましょう（事業終了間際になって収集するのが最も良い時期というデータもあれば、例えば毎月データを収集し、順調に成果が達成できているかを確認した方が良いデータもあるはずです）。
- 調査法及びデータ収集時期の設定にあたっては**決して無理のない方法、時期を設定する**ようにしましょう（評価も大切ですが、事業実施に大きな支障をきたさないように工夫することも重要です）。
- ①及び②で設定した指標に関するデータを収集するためにとてつもなく労力のかかる調査が必要だとわかった場合、**あらためて①及び②の指標を見直してみることも必要**です。
- このように**③と①&②を行き来する中で、より妥当で現実的な評価の設計に近づけていく**ことが重要です。
- 設定に当たっては図表9の例を参考にしてみて下さい。

図表9　データ収集方法とその時期の例

①及び②で設定した指標	データ収集方法	データ収集時期
（最終成果）「芸術文化活動を通して社会に参加できている」と回答する障害者の人数 （中間成果）「芸術文化活動を通して自分の得意なことを行えている」と回答する障害者の人数	対象：A県内に在住する障害者からランダムサンプリング（〇人） 方法：アンケート調査 対象：A県内に在住する障害者からランダムサンプリング（〇人） 方法：アンケート調査	〇年〇月 〇年〇月
1-1 & 1-2. これらの活動が十分に実施できたか（スタッフの認識） 2-1. 配布したチラシの枚数	スタッフ全員が参加する会議での振り返り 配布したチラシをその都度カウント（記録に記載）	当該活動を実施した月の会議 都度

④①～③を評価計画にまとめる

ここまでに提示した①～③に関する情報がまとめられていれば、評価計画の作成は完了です。

【本ガイドで提示するロジックモデルに基づく評価の仕組み】

ステップ2では上記①～④の手順に沿い、評価計画をとりまとめていただけるように本ガイドを構成しました。

しかし、実際には成果に対して妥当な指標や到達点（目標値）を設定する作業、あるいは設定した指標に対して適切・妥当なデータ収集方法を設定することを難しいと思う方も少なくないかもしれません。そこで、後述の【評価のための基準・指標・方法】では評価計画（成果・活動の指標設定やデータ収集方法の設定）に役立つ具体例を提示します。なお、具体例は、本ガイドが提示するロジックモデルと活動のコツ（効果的援助要素）に基づいて作成しています。

具体的にはステップ１で示したA1からD2までのそれぞれの領域、項目ごとに、**１）活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する、２）成果を簡単に評価する、３）成果を社会調査等の方法によって評価する、**の3段階で示しています。また、最終アウトカム、中間アウトカムについては、１）をのぞく２つの評価方法について記述しています。必要に応じて活用してみて下さい。

１）活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する

巻末資料１にある活動のコツ（効果的援助要素）リストに示されたA1からD2項目まで、それぞれの実施状況を5段階で振り返ります（図表10）。ステップ１に示した活動のコツ（効果的援助要素）につ

いて、□に✓がつく数をカウントし、1点～5点のどこに該当するかを確認してみましょう。

図表10　活動のコツ（効果的援助要素）5段階評価の例

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～5要素を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも✓が入っている	示された要素のうち7要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも2つ以上の✓が入っている

なお、この5段階は円環的対話型評価アプローチ法[6]によるもので、

1点：効果的な支援内容が殆ど行われていない

2点：効果的な支援内容が一部に行われている

3点：効果的な支援内容が中程度に行われている

4点：効果的な支援内容が一定レベルで適切に行われている

5点：日本の現状からみて現時点で臨まれる効果的な支援内容

という基準でつくられており、4点以上の獲得を目安として日々の活動を進めていくことができます。

2）成果を簡単に評価する

ここでは、最終アウトカム（上位目的）・中間アウトカム（作戦目的）とA1からD2項目までそれぞれに想定される成果（アウトカム）を振り返ります。

「2）成果を簡単に評価する」で紹介する成果の評価の方法は、それほど大きな労力・資金・時間を必要とせず、簡単に振り返りを行えることがメリットとして挙げられます。一方、デメリットとしては、後述する「3）成果を社会調査等の方法によって評価する」に示した方法・基準と比較して、信頼性・妥当性がそれほど高くなく、より主観的であることが考えられます。

このような特徴から、「2）成果を簡単に評価する」に示す指標は、想定する成果を簡単に評価するために作成したものであり、簡単に活用できる一方で、やや主観的な評価の方法・基準となっています。そのため、一人ではなく複数のスタッフで話し合いをしながらこの部分の振り返りを行う等、少しでも評価結果の信頼性・妥当性を高める工夫を行えると良いでしょう。

[6] 大島巌（2012）「CD-TEP 円環的対話型評価アプローチ法実践ガイド」，平成22年度文部科学省・科学研究費補助金基盤研究（A）（主任研究者：大島巌）

３）成果を社会調査等の方法によって評価する

前述のとおり「２）成果を簡単に評価する」に示した成果（アウトカム）の基準は、やや主観的な内容となっています。最終アウトカム（上位目的）・中間アウトカム（作戦目的）とA1からD2項目までそれぞれに想定される成果（アウトカム）を信頼性・妥当性が高く、客観的な方法で振り返りたい場合は、社会調査等の体系的な方法を活用することをお勧めします。

必ず社会調査をしなければならないということではありませんが、社会調査を行うことのメリットは、信頼性・妥当性が高く、客観的なデータに基づいた振り返りが行える点が挙げられます。一方、デメリットとしては、社会調査を行うためには大きな労力・資金・時間が必要であり、簡単に実施することができない点が考えられます。

どのような方法にもメリット・デメリットがあるため、成果（アウトカム）の状況を振り返りたい支援センターは、振り返りを行う目的は何なのか、そのために最も良い方法・実現可能で現実的な方法は何なのかを検討しながら、振り返りの作業を行えると良いでしょう。

【評価のための基準・指標・方法】

それでは実際に、最終アウトカム（上位目的）・中間アウトカム（作戦目的）・A1からD2の活動のコツ（効果的援助要素）の順に、振り返り（評価）のための基準・指標・方法を示していきます。

最終アウトカム：芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目について「全くいない（1点）」、「あまりいない（2点）」、「少しいる（3点）」、「かなりいる（4点）」の４件法で確認してみて下さい。

● 友人や地域の人たちとつながりながら、芸術文化活動に参加する障害者の数

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

設問の例：「あなたは芸術文化活動を通して、社会に参加することができていますか」

中間アウトカム：芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目についてそれぞれ「全くいない（1点）」、「あまりいない（2点）」、「少しいる（3点）」、「かなりいる（4点）」の４件法で確認してみて下さい。

①芸術文化活動を通して自分の特技を生かせている障害者の数
②芸術文化活動に触れる・関わることでより生活がいきいきとしてきた障害者の数
③複数の芸術文化活動のプログラムから自分の興味や関心に合わせて選択できている障害者の数

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者
②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）
③設問の例：「あなたは芸術文化活動を通して、自分の得意なことを行えていますか」
※ あるいは、障害者を対象に芸術文化活動のプログラムを行う団体を対象にした調査を実施し、「自団体が提供する芸術文化活動のプログラムを通じて活躍している障害者をどれくらい知っているか」と尋ねる方法等も考えられます。

■ 成果を評価するにあたっての大事なポイント

成果を評価する際に、障害当事者へ調査（アンケートやヒアリング等）を行うこともあると思います。その場合は、できる限り障害に配慮し、環境を整えたり、調査票への回答がしやすくなる方法等を検討したりしながら、ご本人に回答していただくことが望ましいです。

様々な理由でどうしても困難な場合は、支援者やご家族等の協力等で調査を行うことも可能ですが、その際は、そのようにして行ったという情報を明記しておくことが推奨されます。また社会調査等に関しては、場合によっては評価の専門家等を活用することも、有効かもしれません。

A領域：より多くの障害者が芸術文化活動に取り組めるための支援

A1：地域の障害者による芸術文化活動の現状を理解するための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～5要素を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも✓が入っている	示された要素のうち7要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも2つ以上の✓が入っている

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動の現状を把握しているか」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全く把握していない（1点）」、「あまり把握していない（2点）」、「どちらともいえない（3点）」、「まあまあ把握している（4点）」、「十分把握している（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

＜美術の活動・プログラムについて＞ ① 障害者福祉施設（入所・通所含む）での活動 ② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等での活動 ③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館等）で行われている活動 ④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）で行われている活動 ⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等）で行われている活動 ⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室、習い事等）
＜舞台芸術の活動・プログラムについて＞ ① 障害者福祉施設（入所・通所含む）での活動 ② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等での活動 ③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館等）で行われている活動 ④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）で行われている活動 ⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等）で行われている活動 その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室、習い事等）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 特になし

A2：障害者の芸術文化活動に関する相談事を解決する活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5～6要素以上を満たす	示された要素のうち7～9要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に関する相談支援」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「困難があり、全く対応できていない（1点）」、「困難があり、あまり対応できていない（2点）」、「どちらともいえない（3点）」、「困難はあるが、対応できている（4点）」、「困難もなく、十分に対応できている（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

＜美術分野について＞

① 美術の鑑賞に関する相談
② 創作環境に関する相談（はじめたい、充実させたい、関わりたい、見学したい）
③ 展示発表機会に関する相談（作品を発表したい、展覧会を開催したい、出展を依頼された）
④ 作者の権利譲渡に関する相談（作品の）出展契約、寄託、二次利用
⑤ 作品の販売商品化に関する相談
⑥ 作品のグッズ化、媒体化に関する相談

＜舞台芸術分野について＞

① 舞台芸術の鑑賞に関する相談
② 創作環境に関する相談（はじめたい、充実させたい、関わりたい、見学したい）
公演・発表機会に関する相談（公演を企画・開催したい、依頼された）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなたは芸術文化活動に関して悩んでいること・相談したいことはありますか」、「あなたが悩んでいること・相談したいことは解決できそうですか（あるいは、解決できましたか）」

④想定される結果：相談事が解決した障害者の人数

A3：障害に配慮した芸術文化活動の情報を収集・発信し、届ける活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない	示された要素のうち1要素を満たす	示された要素のうち2要素を満たす	示された要素のうち3要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者が芸術文化活動にアクセスしやすくなるための取り組み状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全く行われていない（1点）」、「あまり行われていない（2点）」、「どちらともいえない（3点）」、「まあまあ行われている（4点）」、「十分行われている（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

＜担当都道府県における障害者が芸術文化活動にアクセスしやすくなるための取り組み＞

① 文化施設(劇場)、映画館、美術館等
② 文化施設での点字や拡大文字、副音声、音声補聴等情報保障の充実
③ 芸術文化活動関連イベント情報の発信方法の多様化
④ 親子室等別室での鑑賞
⑤ 舞台事前説明会
⑥ 台本の事前貸し出し
⑦ 障害と芸術文化双方に知見がある人材（コーディネーター、通訳等）の育成
⑧ その他（　　）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなたのもとに地域の芸術文化活動に関する情報は届いていますか」、「あなたのもとに届く芸術文化活動に関する情報は、あなたにとって分かり易いものですか」

④想定される結果：芸術文化に関する情報が届いている障害者の人数

B領域：障害者が芸術文化活動に主体的に参加できる機会を増やすための支援

B1：障害者が作品を創造し、発表する機会を増やすための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5～6要素を満たす	示された要素のうち7要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の創造や発表の機会の新規提供や拡大の状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

＜発表の機会を新たに提供している＞

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）の数
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等）で行われている活動
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室、習い事等）

＜発表の機会を拡大し提供している＞

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）の数
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館等）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）で行われている活動
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等）で行われている活動
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室、習い事等）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：（上記の設問にあるような）支援センターが担当する都道府県内の障害者施設・芸術文化施設・芸術文化活動を行う団体

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県内の施設・団体のリストを入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「貴施設（団体）では発表の機会を新たに設けましたか」、「貴施設（団体）では発表の機会を拡大しましたか」

④想定される結果：発表の機会を新たに設けた施設（団体）の数、発表の機会を拡大した施設（団体の数）

B2：障害者の作品制作や表現の技術向上につながる機会を増やすための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

	2点	3点	4点	5点
	示されたいずれの要素も満たさない	示された要素のうち1要素を満たす	示された要素のうち2要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者本人の作品や表現の技術向上につながる機会」について尋ねた設問です。それぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

＜発表の機会を新たに提供している＞ ① 専門家やプロのアーティストからアドバイスを個人もしくはグループで受ける機会 ② 障害者の芸術文化活動に知見のあるスタッフが伴走し、表現を追求する機会 ③ 芸術文化活動全般の勉強会や研修会に参加する機会 ④ 創作場所や練習場所等が確保できる機会 ⑤ 創作・練習等に必要な道具や機器の影響 ⑥その他（　　）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなたが作品制作や表現の技術向上につながる機会を求めたとき、そのような活動はあなたの身近に存在しますか」

④想定される結果：作品や表現の技術向上の機会を得ている障害者の数

B3：障害者の芸術文化活動に対する社会的認知を高めるための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5～6要素を満たす	示された要素のうち7～8要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に関する社会的認知の機会」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

＜発表の機会を新たに提供している＞

① 障害者の芸術文化活動が来場者や訪問者から評価を受ける機会
② 障害者の芸術文化活動が芸術文化の専門家から評価を受ける機会
③ 障害者が関わる作品や舞台公演がメディアで取り上げられる機会
④ 障害者の美術作品が売買される機会
⑤ 障害者の美術作品がグッズ化される、地方自治団体や企業の広報物等で採用される機会
⑥その他（ ）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する人（都道府県民）

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する人（都道府県民）の名簿を入手します（例えば、自治体に協力を得て、自治体が行う調査と合わせて実施をさせてもらう等の工夫が必要です）

③設問の例：「あなたは障害者の芸術文化活動について知っていますか」

④想定される結果：障害者の芸術文化活動について知っている都道府県民の人数

C領域：障害者の芸術文化活動に従事する人・団体（関係者）がより質の高い活動を行うための取り組み

C1：関係者の必要な知識やスキルを向上し、地域の団体が組織・事業として障害者の芸術文化活動に取り組めるようになるための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5～6要素を満たす	示された要素のうち7～8要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における質の高い障害者の芸術文化活動支援の状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全く充実してない（1点）」、「あまり充実していない（2点）」、「変わらない（3点）」、「少し充実した（4点）」「とても充実した（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等）
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室、習い事等）

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に従事する人・団体の知識・スキルの状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「かなり低下した（1点）」、「やや低下した（2点）」、「変わらない（3点）」、「少し向上した（4点）」、「とても向上した（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

① アーティストの権利擁護に関する知識
② 商品化に関する知識やスキル
③ キュレーションに関する知識やスキル
④ 広報に関する知識やスキル
⑤ イベント企画・運営に関する知識やスキル
⑥ 障害特性の理解に関する知識やスキル
⑦ 障害特性を理解した上で支援する技術
⑧ その他（　　）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に従事する人・団体

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県内で障害者の芸術文化活動に従事する人・団体のリストを入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなた（貴団体）は障害者の芸術文化活動に関して十分な知識・スキルを有していると思いますか」

④想定される結果：障害者の芸術文化活動に関して十分な知識・スキルを有している人（団体）の数

（改ページ）

C2：（障害者の芸術文化活動を支援する）多様な主体のネットワークを強化する活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5～6要素を満たす	示された要素のうち7～8要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における、情報・ノウハウの共有を行える場や環境」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

● 仮に地域の団体が障害者への芸術文化活動の支援力をより上げたいと思ったとき、地域に情報・ノウハウの共有を行える場や環境が、どの程度存在しているか。

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に従事する人・団体

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県内で障害者の芸術文化活動に従事する人・団体のリストを入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなた（貴団体）が活動する都道府県には、障害者の芸術文化活動に取り組む人たち（団体同士）のネットワークが充実していると思いますか」

④想定される結果：ネットワークが充実していると思う人（団体）の数

D領域：地域に（障害者の芸術文化活動を支援する）多様な主体のネットワークを強化する活動

D1：地域住民が芸術文化活動を通して障害者と交流できる場をつくるための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない	示された要素のうち1～2要素を満たす	示された要素のうち3～4要素を満たす	示された要素のうち5要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動を通して障害者と地域住民が交流する場の状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

＜障害者と地域住民が交流する機会を提供しているか＞

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等（アートNPO、公益財団法人等）
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等を含む）
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室等地域のお稽古・習い事等）

- 以下の項目も「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動を通して障害者と地域住民が交流する場の状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「かなり減っている（1点）」、「少し減っている（2点）」、「変わらない（3点）」、「少し増えている（4点）」、「とても増えている（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

＜障害者と地域住民が交流する機会は増えているか＞

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等（アートNPO、公益財団法人等）
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等を含む）
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室等地域のお稽古・習い事等）

- 以下の項目も「担当する都道府県における障害者の芸術文化活動を通して障害者と地域住民が交流する場の状況」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

＜障害者と地域住民が交流する機会を創出しているか＞

① 障害者福祉施設（入所・通所含む）
② 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等（アートNPO、公益財団法人等）
③ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
④ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
⑤ コミュニティスペース（カフェ、図書館、役所のホール等を含む）
⑥ その他（地域のダンスクラブ、ピアノ教室、絵画教室、造形教室等地域のお稽古・習い事等）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する障害者

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する障害者の名簿を入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「芸術文化活動を通してあなたが地域の様々な人と交流する機会はありますか」

④想定される結果：芸術文化活動を通して地域住民と交流している障害者の数

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県における障害者の芸術文化活動に従事する団体

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県内で障害者の芸術文化活動に従事する人・団体のリストを入手します（もし全数を対象とした調査が難しければ、この名簿から無作為に対象を選定します）

③設問の例：「あなた（貴団体）は芸術文化活動を通して障害者と地域住民が交流する機会を設けていますか」

④想定される結果：芸術文化活動を通して障害者と地域住民が交流する機会を設けている団体の数

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する人（都道府県民）

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する人（都道府県民）の名簿を入手します（例えば、自治体に協力を得て、自治体が行う調査と合わせて実施をさせてもらう等の工夫が必要です）

③設問の例：「あなたは芸術文化活動を通して障害のある人と交流していますか」

④想定される結果：芸術文化活動を通して障害のある人と交流している都道府県民の人数

D2：地域住民の障害者の芸術文化活動に関する関心を高めるための活動

＜活動のコツ（効果的援助要素）の実施状況を評価する：巻末資料1・2参照＞

1点	2点	3点	4点	5点
示された要素のいずれも満たさない	示された要素のうち1要素を満たす	示された要素のうち2要素を満たす	示された要素のうち3要素を満たす	示された要素のすべてを満たす

＜この項目の成果を簡単に評価する＞

- 以下の項目は「担当する都道府県における地域住民の障害者の芸術文化活動に関する関心」につい

て尋ねた設問です。「全くない（1点）」、「あまりない（2点）」、「少しある（3点）」、「かなりある（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

● 担当都道府県における地域住民の障害者の芸術文化活動への関心

- 以下の項目は「担当する都道府県における地域住民の障害者の芸術文化活動に関する関心の変化」について尋ねた設問です。「とても下がっている（1点）」、「少し下がっている（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「少し高まっている（4点）」、「とても高まっている（5点）」の5件法で確認してみて下さい。

● 担当都道府県における地域住民の障害者の芸術文化活動への関心

- 以下の項目は「担当する都道府県における地域住民の障害者の芸術文化活動への参加」について尋ねた設問です。これらについてそれぞれ「全くあてはまらない（1点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、「少しあてはまる（3点）」、「とてもあてはまる（4点）」の4件法で確認してみて下さい。

① 無料の障害者の芸術文化活動に係る美術展、舞台公演、イベントへの来場者数が増えた ② 有料の障害者の芸術文化活動に係る美術展、舞台公演、イベントへの来場者数が増えた ③ 障害者と一緒に作品をつくる取り組みにより多くの人が参加するようになった ④ 障害者が地域で芸術文化活動を行える機会が増えた ⑤ 作品をグッズ化したものの売り上げが増えた ⑥ 作品の購入・レンタル件数が増えた ⑦ 今までつながっていなかったアーティストや地域の団体から、障害者の芸術文化活動に関わる協力のオファーが増えた（例：一緒に何かイベントを企画したいという申し出や、障害者の芸術文化活動に係る企画を行いたいという知己の団体が増えた等）

＜この項目の成果を社会調査等の方法によって評価する＞

- 郵送によるアンケート調査

①対象：支援センターが担当する都道府県に在住する人（都道府県民）

②対象の選定方法：自治体に協力を得る等し、担当する都道府県に在住する人（都道府県民）の名簿を入手します（例えば、自治体に協力を得て、自治体が行う調査と合わせて実施をさせてもらう等の工夫が必要です）

③設問の例：「あなたは障害のある人も出展・出演する展覧会や舞台公演、イベント等へ参加をしたことがありますか」、「あなたは障害のある人が創作に関わっている作品や商品を購入したことがありますか」

④想定される結果：障害者の芸術文化活動に参加する地域住民の人数

4. ステップ３：事業計画と評価計画に沿って実際に取り組んでみよう

《このステップで行うこと》

事業計画・評価計画に沿って実際活動に取り組む

ステップ3では、ステップ1で作成した事業計画とステップ2で作成した評価計画を参照しながら、実際に事業を実施します。

実際の活動では、いくら活動計画を精緻に作成したとしても、社会的な状況（例：新型コロナウイルスのまん延）やその他予期せぬ出来事等によって、計画が思いどおりに進まないことも多々あるかと思います。このように事業年度途中に周囲への変化に適応しながら、事業を修正したり、検討したりことは簡単なことではないかもしれませんが、変化・適応において重要なことは、再度事業計画時に策定している成果目標に立ち戻り、目標の達成に向けて、手段としての「事業」の在り方や方法を検討することです。本ガイドが提案する事業計画と評価計画づくりは、成果目標（アウトカム）を重要な要素として据えており、「事業」という目的達成の「手段」が目的化してしまうことを防ぎます。

例えば、「障害者の芸術文化活動における悩み事を解決する」ことを目標に、支援センターでの対面での相談事業の提供を計画していた場合、新型コロナウイルスの影響で対面相談が制限されることを経験した支援センターも複数存在したのではないかと思います。そのようなときに、対面相談ができなくなってしまったから、事業が遂行できなかったという結果の評価も可能ですが、アウトカムに照らして考えた場合、対面相談でなくても、何かしらの方法によって「障害者の芸術文化活動における悩み事を解決する」ことができるのであれば、まだその成果の達成に近づく余地があることがわかります。実際、いくつかの支援センターが相談事業のオンライン化を実装した例があったかと思いますが、このように事業年度途中で「事業活動」の変更を強いられることがあったとしても、目指すアウトカムに立ち戻ることで、新たな事業アイデアが出てくる可能性があります。もちろん、代替となる事業案を検討する際には、それにともなうインプット（資源）の検討も必要ですが、成果目標に照らして事業計画を作成しておくことは、事業計画の修正にも役立ちます。

また、すでにステップ1と2を通して、事業計画と評価計画が一体不可分であることもお分かりいただけるのではないでしょうか。事業計画の修正やアップデートがあれば、それに伴い評価計画の見直しも必要です。事業終了後に適切に評価ができるように、事業計画や評価計画の見直しがあった場合は、そのタイミング等を忘れずに双方の計画に記録しておくことも有益です。

5. ステップ４：評価結果をもとに事業を振り返ろう

《このステップで行うこと》

① 評価結果を確認する

② 事業の良かった点（達成できた成果）
&改善点（今後の展望）を考える

③ 評価結果を次の事業計画に活かす

ステップ3では、事業計画及び評価計画に基づいて着実に事業を実施してきました。もしかすると事業の進捗に伴って様々な障壁があり、その都度事業計画や評価計画を修正しながら事業を進捗させて来られたかもしれません。

このステップでは、事業計画や評価計画に沿って進めてきた**事業を振り返り、**さらに評価結果を次の事業計画に活かします。このことは事業の継続的な改善のために重要です。そのための具体的な作業例は次のとおりです。

①評価結果を確認する

ここではまず、ステップ2で作成した評価計画に沿って実施された評価の結果を確認します。以下のような問いを立てながら、活動の実施状況・成果の達成状況を確認することが重要です。

- 評価計画に設定した活動の実施状況はどうだったか（問題なく予定した活動に取り組むことができていたか、できなかったか）
- 評価計画に設定した成果の達成状況はどうだったか（到達点（目標値）をクリアすることができたか、できなかったか）

活動の実施状況・成果の達成状況を確認する際は、ステップ2で定めた「指標」「到達点・目標値（あるいは目標とする基準）」「データ収集方法」「データ収集時期」といった情報に基づいて行われた評価によって確認されたことを「評価結果」として取りまとめます。評価結果の具体的な内容は、当然成果目標や指標、判断基準等によって異なりますが、図表11が例になります。

図表11　評価結果の例

活動	指標	目標とする基準	データ収集方法	データ収集時期	評価結果
1-1. 関係者に障害者の芸術活動支援に必要な研修会・勉強会を行う 1-2. 障害者と関係者がともに芸術文化活動の企画を行う	1-1 & 1-2. これらの活動が十分に実施できたか（スタッフの認識）	1-1 & 1-2. 支援センターのスタッフ全員が「十分に実施できた」と評価している	スタッフ全員が参加する会議での振り返り	当該活動を実施した月の会議	おおむねスタッフからは「十分に実施できた」という意見が聞かれたため十分であったと評価できる。
2-1. 必要に応じて、障害者の芸術文化活動についてのチラシ等を作成し、地域住民向けに配布する ・・・・・	2-1. 配布したチラシの枚数	2-1. ○枚	配布したチラシをその都度カウント（記録に記載） ・・・・・	都度	目標とした○枚に対して○枚の配布があったため十分であったと評価できる。

なお、評価結果をとりまとめる際は、以下の点に注意をしましょう。

- 評価は単に調査結果（事実）を明らかにするだけではなく、それが十分な水準にあるかどうかという**価値判断**を行うことが必要です。
- そのため「評価結果」の欄には、調査結果（事実）を記載したうえで**「～であったため十分であった（あるいは不十分であった）と評価する」**という記載をします（この部分は到達点・目標値（あるいは目標とする基準）との比較になります）。
- また、**成果の達成状況は活動の実施状況との関係で考察をしてみる**と良いでしょう（活動の実施状況が全て不十分でありながら成果の達成状況は十分という結果であれば、事業計画に規定した活動が成果の達成に何ら影響を及ぼしていない可能性が考えられます）。

②事業の良かった点（達成できた成果）＆改善点（今後の展望）を考える

さて、次は先ほど確認した評価結果をもとに事業の良かった点（達成できた成果）＆改善点（今後の展望）を改めて考え、次の事業計画に活かすことのできる教訓を確認します。先のステップで評価結果はとりまとめられていると思いますので、各評価結果をもとに振り返りを行います。そして最後に振り返った内容をもとに今後どのように事業を進捗させていくべきかについて、また「改善点（今後の展望）」を検討します。

なお、これらの作業にあたっては以下の点に注意をしましょう。

- 振り返りや改善点（今後の展望）を検討する際には、**様々な関係者と協議をしながら検討することも必要**です（例えば、事業に関わる多くのスタッフや行政職員、障害者施設・文化施設の担当者と一緒に考えられると良いかもしれません）。
- 振り返りや改善（今後の展望）を検討する際に**分野（障害者支援や文化芸術等）の専門家に助言を求める**のも良いでしょう。

以下、図表12に評価結果に基づいた振り返りと改善点の例を紹介します。

（改ページ）

図表12　評価結果に基づいた振り返りと改善点の例

成果目標	評価結果	振り返り	改善点（今後の展望）
（最終成果）芸術文化活動を通して、障害者が社会参加できるようになる	昨年度と比較して〇人の減少があったため不十分と評価する。	・昨年度に比較して減少であったため、取り組みの改善が必要。 ・ただ設定した到達点の水準も高すぎたため、次年度はこの水準を低くする必要もある。	・この成果の達成に向けて新たに～という活動を実施する。 ・また到達点も昨年度水準を維持すること（〇人）を目標とする。
（中間成果）芸術文化活動を通して、障害者が個性と能力を発揮できる ・・・・・	昨年度と比較して2倍（〇人）の回答があったため十分に達成と評価できる。	・十分な達成がみられた。特に～という活動が目標の達成に貢献したと考えられる。	・現状の取組みを維持する。

③評価結果を次の事業計画に活かす

ここまでの作業、お疲れ様でした。ステップ1で「事業計画」を作り、ステップ2で「評価計画」を作成しました。そしてステップ3で実際に事業に取組み、このステップ4で総まとめとして「評価結果」を確認し、事業の良かった点や改善点を考えました。このステップ4をとおして事業の実施状況や成果の達成状況、そしてこれらから導き出される次年度への展望（教訓）が明らかになったことと思います。**これをまたステップ1「事業計画を作成する」に反映**させることで、継続的に事業を改善させることができ、より良い成果の達成につながっていくでしょう。

6. 本ステップの報告書作成への活かし方について

ステップ1～4を行うことで、支援センターの1年間の事業計画、評価計画、その評価結果と評価結果からの振り返りの学びが手元にまとまっているのではないでしょうか。このように一連の流れの中で整理された情報やデータは、皆さんが関係者や社会へ成果を報告する「報告書」を取りまとめる際にも役立ちます。報告書は誰を対象に、どのような目的で報告するかによっても必要な情報が異なります。しかし、本ガイドの冒頭で事業が生み出したものに価値を付与することが、「評価」の本質だとご説明したとおり、報告書の作成をとおして、この支援センターという事業の「価値」をしっかり見える化し、社会に示していくという点では、多くの目的において通底するものです。

本ステップを経て取りまとめられた情報を「報告書」の作成に活用する場合は、以下の点に注意していただき、取り組んでいただくと良いでしょう。

- 報告書の目的や対象を意識して、情報やデータを選択しましょう。
- 報告書に書ききらないほど多くの分量があるようでしたら**特に皆さんが重要な成果だと認識していることや、報告書の目的に照らして優先順位の高い事項を選び、**報告書を作成します。
- 読者は報告書に記入してある内容からしか皆さんの事業成果（事業の価値）を判断するしかありません。特に事業の結果だけではなく、成果についての情報を求められる際は、報告書は成果目標、そのために取り組んだ活動、達成した成果、今後の展望等が一貫性をもって報告できるように作成しましょう。

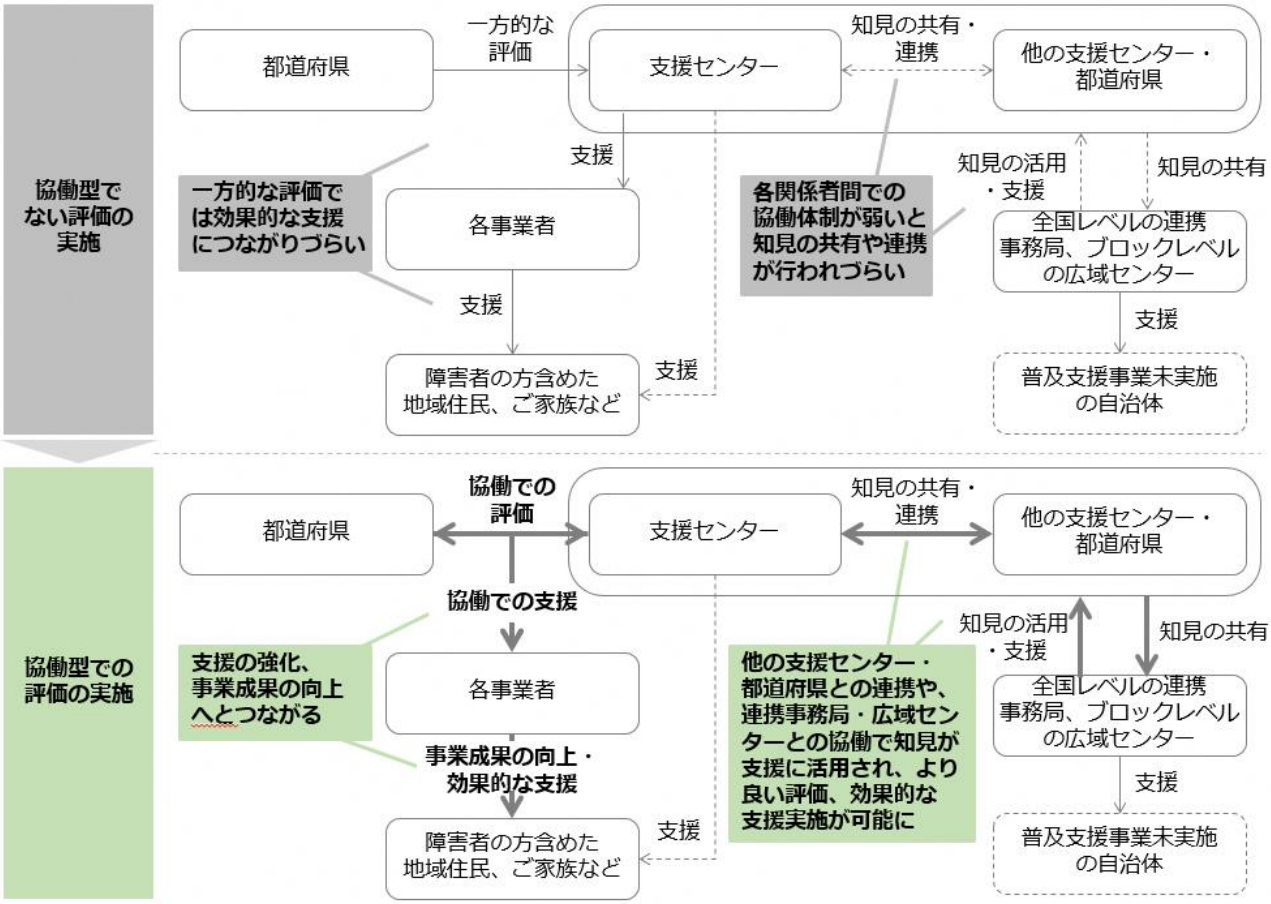
7. 協働型評価のすすめ

本ガイドでは、支援センターが事業者として事業を振り返ることに加え、各支援センターに関わる多様な関係者等、なるべく多様な主体と一緒に振り返りや成果の価値判断を行うことを推奨しています。これは、支援センターが行った独自の振り返りや自己評価に加え、多様な視点が入ることで、自分たちでは気づかなかった成果や変化に気づくことにつながるためです。また自己評価と他者評価（第三者評価を含む）で評価判断が異なった場合に、その認識の差がなぜ起こるのかについて一緒に考えてみたり、支援センターで気づかなかった視点を取り込んでみたりすることで、事業改善の機会や、協働の可能性を模索することへとつながります。

また、普及支援事業は全国規模で行われている事業であり、新しく始めた団体は先輩の団体から、あるいは舞台芸術支援体制を強化したい団体は、その領域で成果を生んでいる団体から学ぶことができる等という、全国型事業の強みがあります。一方で、普及支援事業は、多様な背景や歴史を持つ団体や専門家が関わり、福祉の文脈での価値、芸術文化の文脈での価値、共生社会の文脈での価値等、様々な価値観や概念が交錯している現場であることも事実です。そのときに、本ガイドがロジックモデルで整理した目指す成果目標は、普及支援事業で支援センターが事業評価を行う際の「共通言語」のようなものだと考えていただくと良いかもしれません。普及支援事業の目的と、その達成に有意に紐づいている活動を明らかにし、その活動をどのように行い、どれくらいの成果・変化が生み出せたのかというところに、各支援センターの独自性、創造性、学ぶべきポイントがあり、それらを他の支援センターや広域センター・連携事務局と共有化していくことが、全国的な障害者の芸術文化活動の支援体制の構築へとつながっていきます。図表13に協働型の評価の実施が、普及支援事業にどんな影響を与えるかについて、「協働型でない評価」と「協働型での評価」を比較してまとめています。

そして、知見の共有を進めていく中で、普及支援事業の目的をより良く達成するためには、本ガイドにある活動のコツ（効果的援助要素）にないものが効果を生んでいることが分かったり、社会参加を促進するためには別の達成課題が見えてきたりすることが当然あると思います。そのときは、この活動のコツや成果、そしてロジックモデルを書き換え、さらに良いものへブラッシュアップすることができます。

図表13　協働型で行う評価の関係図



8. 活用事例

改訂版ガイドの作成にあたり、新しい試みとして本ガイドを活用して実際ロジックモデルづくりや事業計画・評価計画づくりに取り組んだ2つの支援センターの取り組みについて紹介します。

①アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター（アイサ）

■ どのようにガイドを活用しましたか

本ガイドに説明されているパターン1の方法を取り、原則的にガイドに記載されている成果目標/アウトカムを参照し（成果目標/アウトカムの表現の一部を支援センターの実情に合わせて修正）、支援センターが目指していくゴールを整理・明確化し、それに紐づく活動が何かを考えました。

■ どんなメンバーでロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしましたか。

アイサに関わるスタッフ5名で議論をしながら作りました。まず半日くらいかけて目指す成果目標を整理し、活動を紐づけました。大枠を作った後、指標や目標値等については一旦、個人作業とし、後日もう一度集まってそれぞれの案を擦り合わせながら事業開始前に完成させました。

■ ガイドを参照してロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしてみて良かった点はどんな点ですか。

ガイドを活用する前は、活動することが目的になっていた部分もありました。しかし、ロジックモデルを使って整理することで、自分たちの支援センターや事業が何のためにあるのかということが整理されました。また、ロジックモデルを関わるスタッフと一緒に作りながら、事業をデザインすることで、ひとつひとつの活動がこの事業に関わるひとたちみんなのものになったという実感がありました。

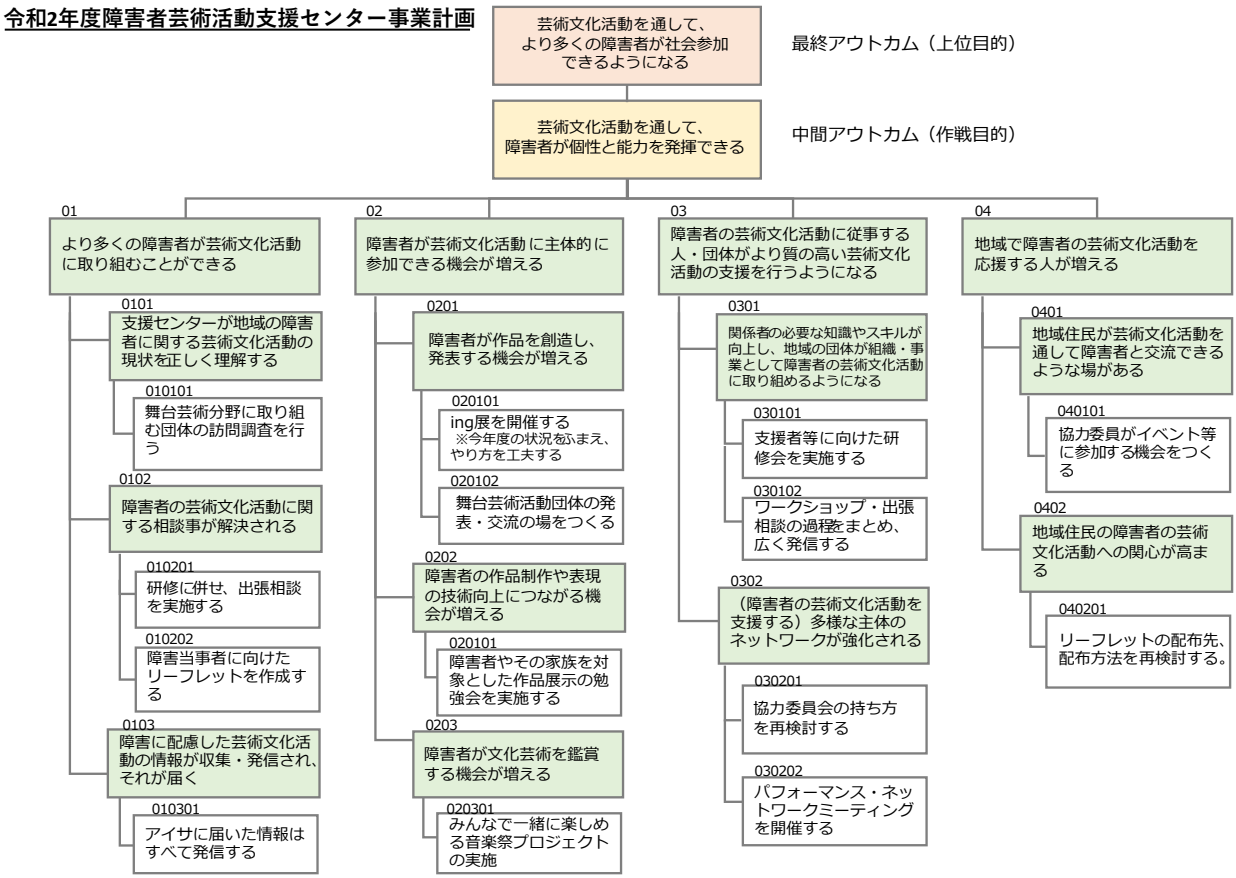
■ ロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしてみて難しかった点はどんな点ですか。

ロジックモデル自体を整理したり、活動と目的を整理したりするのはそこまで大変ではありませんでした。一番難しかったのは成果評価の立て方や達成基準の立て方で、何で測ると良いのか悩む部分が多かったです。しかし、そうすることで、予算づくり等にも役に立つことがわかりました。

■ 日常的にどの程度作成したロジックモデルや事業計画・評価計画に立ち戻っていますか。

現時点では特にこれを振り返るためだけの定期的な会議等は設けていません。ただ、日常的な会議の中で、イベントが終わったら振り返る等して活用しています。

図表14　アイサのロジックモデル



②福岡県障害者芸術文化活動支援センターFACT

■　どのようにガイドを活用しましたか

最初にガイドのアウトカムを参照してロジックモデルと活動を結び付けた後、支援センター独自のロジックモデルを作成しました。

■　どんなメンバーでロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしましたか。

FACTのスタッフ2名が中心となって作成しながら、センター長からも作成のプロセスでコメントをもらいました。作成にあたっては、事務所の壁に模造紙を貼り、アウトカムと活動を結び付けていく作業をしました。日常的に思いついた活動やアイデア等もすぐにアウトカムと紐づけて貼れるようにしています。

■　ガイドを参照してロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしてみて良かった点はどんな点ですか。

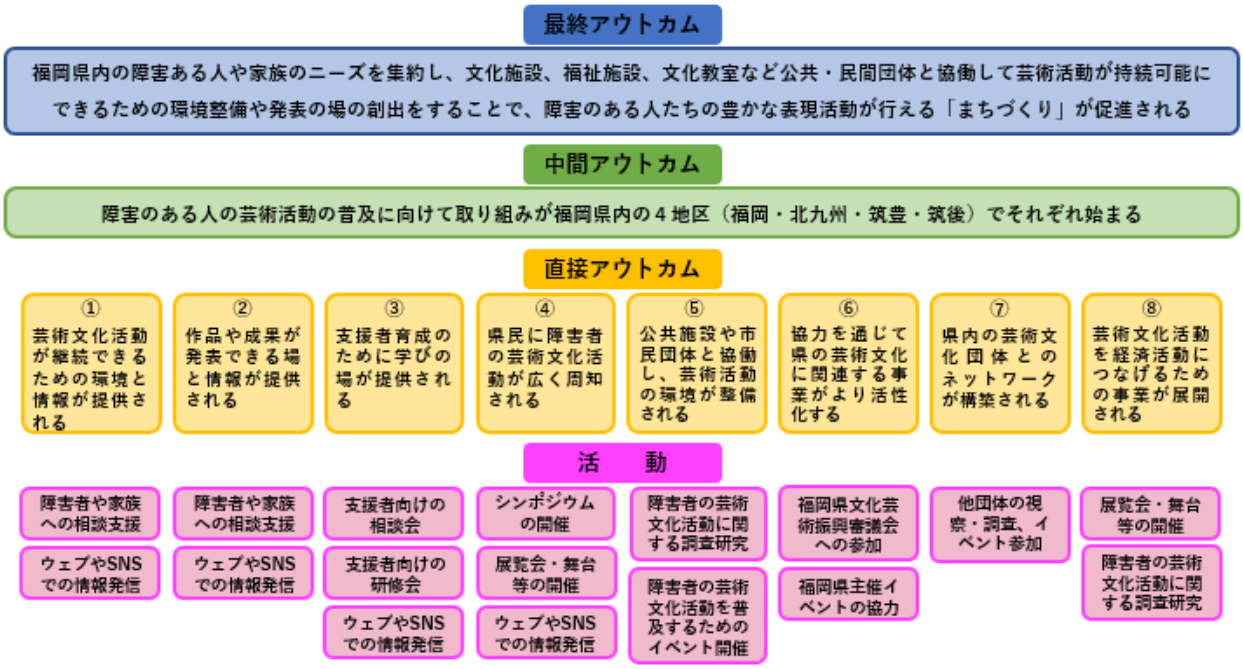
活動だけを考えるのではなく、成果目標やアウトカムを意識することで、何のために行っているのかという目的意識をより強く持つことができました。また、新しいスタッフが入ってきて、まだセ

ンターの事業や活動に慣れていなくても、このように整理されていることによって、活動やセンターの目的・意義等を理解するのに役立ちました。

■ ロジックモデルや事業計画・評価計画づくりをしてみて難しかった点はどんな点ですか。

指標はひとまず設定はしていますが、これで正しいのかと思う部分もあり、難しいと部分が多かったです。何をもって自分たちとしては成功なのかという基準値を設定する必要があることを改めて認識しました。

図表15　FACTのロジックモデル



おわりに

本ガイドは普及支援事業の支援センターの現場（モデル事業からの地域の障害者の芸術文化支援のコーディネートの知見も含む）の活動を見える化し、各支援センターが事業改善に取り組み、多様な主体が関わる事業を評価していく上での共通言語となるものとして、開発しました。本ガイドが支援センターの現場で活用されることによって、普及支援事業がより効果的なものになり、また、未実施自治体での施行等につながり、芸術文化活動を行う障害者や関係者に、サポートや機会が行き渡ることを期待します。

本ガイドは、支援センターの担当者の方々を始め、自治体の担当者や障害者福祉、文化政策、評価の専門家の協力のもと作成したものですが、さらに改善の余地があると考えております。そのために全国の支援センターの皆さまには、本ガイドを活用いただき、フィードバックすることを通して、本ガイド作成時には見出せていなかった成果や活動等を加えながら、今後もより良いツールに発展させていただきたいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中、ヒアリング調査やアンケート調査にご協力下さった皆様に、厚く御礼申し上げます。

巻末資料１：障害者芸術文化活動普及支援事業　支援センター活動のコツ（効果的援助要素）チェックリスト

日付	年　　月　　日
支援センター名	

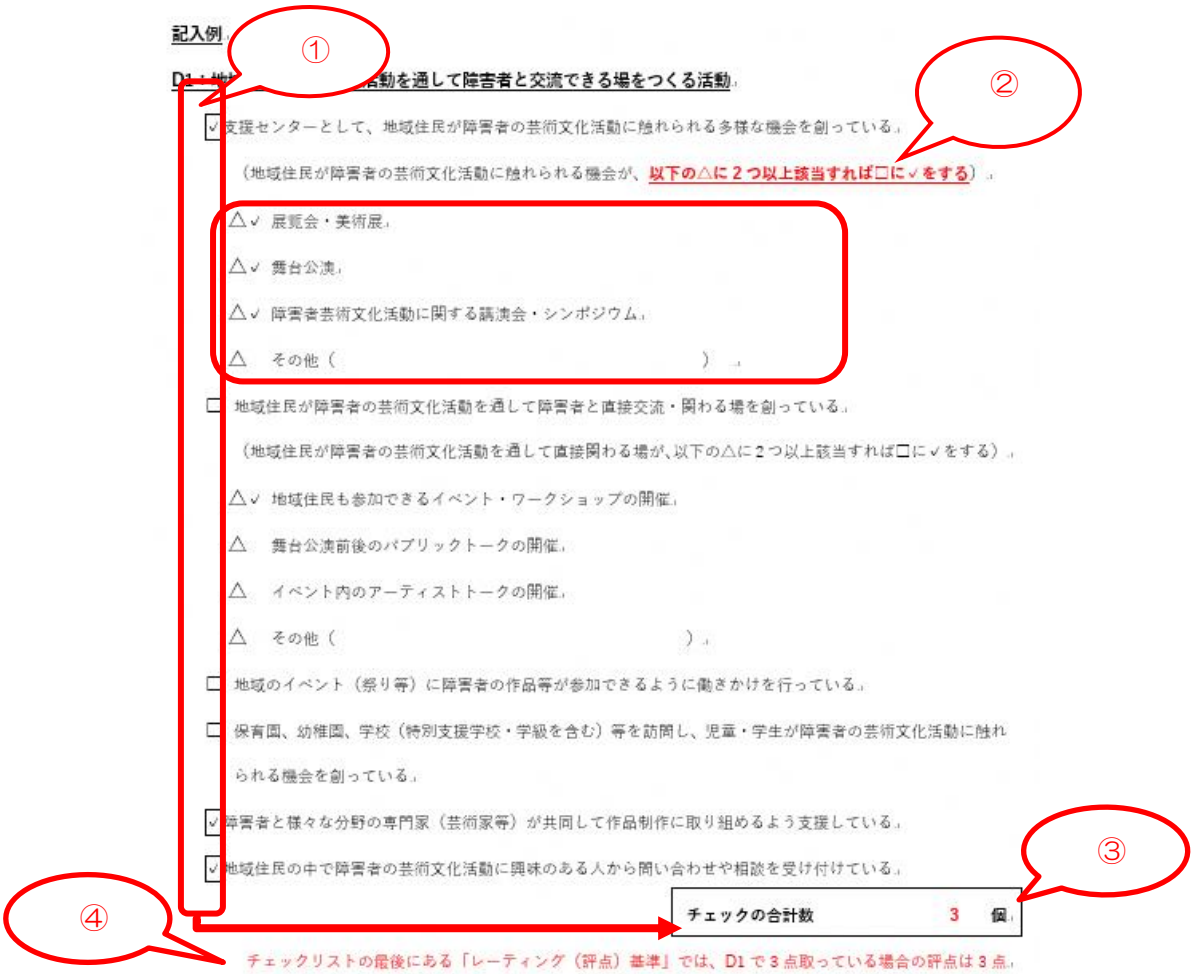
＜活動チェックリストの回答方法＞　※下記の記入例を参照して下さい。

① 各支援センターが担当の都道府県内において行っている活動について、1つ1つの活動項目を確認していただき、**その活動を行っていれば□に✓**を入れて下さい。

② □の下に項目（△）を用意している設問に関しましては、△にも✓していただいた上で、□の要件を満たす場合に、□に✓を入れて下さい。

③ 項目（A1、A2等）ごとに**□についた✓の数（△は含まない）**を数え、項目の最後にある「チェックの合計数」に記入して下さい。

④ チェックリストの最後にある「レーティング（評点）基準」を参照し、A1～D2まで「チェックの合計数」に記入した数字に該当する評点に丸をつけて下さい。



Ａ領域　より多くの障害者が芸術文化活動に取り組めるための支援

この領域は、支援センターが地域の障害者芸術文化活動に関する情報を理解し、これらの情報を活用しながら障害者の相談事に対応したり、必要な情報を提供したりするための具体的な活動内容を規定しています。

A1　地域の障害者による芸術文化活動の現状を理解するための活動

・以下に記載する活動に取り組み、地域の障害者による芸術文化活動の現状を理解します。

〈a〉障害者福祉施設や文化施設を対象としたアンケート調査を行う

□ 様々な団体・施設を対象とした障害者の芸術文化活動の現状把握のためのアンケート調査を実施する

（以下の△について3つ以上該当すれば✓をする）

△ 障害者福祉施設（入所・通所含む）

△ 芸術文化活動を主眼として活動するNPO等（アートNPO、公益財団法人等）

△ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館等）

△ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級含む）

△ その他（　　）

□ アンケート調査の結果を分析し、地域の障害者による芸術文化活動の全体的な活動状況や特性、課題等を明らかにする

〈b〉障害者の芸術文化活動の現状把握のための現場訪問調査を行う

□ 現場訪問調査の対象として、障害者の芸術文化活動を盛んに行う団体や施設等を選定する

□ 現場訪問調査の対象として、障害者の芸術文化活動に関心があるものの、十分な活動を行えていない団体や施設等を選定する

□ 現場訪問調査では、障害者の芸術文化活動に関する具体的な取り組みの状況を把握する

□ 現場訪問調査では、障害者の芸術文化活動に取り組むことができない団体や施設等の課題を明確にする

〈c〉障害者の芸術文化活動に関する既存の調査を活用する

□ 他団体が行った担当の都道府県における調査の結果を、現状把握に役立てる

□ 他団体が行った担当の都道府県以外の地域における調査結果を、現状把握に役立てる

〈d〉定期的に調査を実施する

□ 網羅的なアンケート調査を定期的に行う

□ 現場訪問調査を定期的に行う

※「定期的」とは、例えば「1年に1度」、「数か月に1度」や「〇か月ごとに」、「毎月〇日に」等を意味します。

チェックの合計数	個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

- アンケート調査にあたっては、回収率を高めるために、調査の趣旨や目的、得られた結果の活用方法を明確に示す。（例えば、コーディネーター役として広く地域の状況を把握するか、ターゲットを絞った分野や地域の状況を把握する等）
- アンケート調査にあたっては、回収率を高めるために行政からの協力依頼文書を添付する。
- 網羅的なアンケート調査の結果を参考にし、現場訪問調査の対象を選定する。
- 訪問先には事前に連絡を取り、可能な限り芸術文化活動実施日に訪問し、担当者へのインタビューとあわせて活動の見学を行う。
- 現場訪問調査について、見学が実践者の負担にならないか、記録用写真・映像の撮影が可能かを確認する。
- 現場訪問調査の際、施設や活動の概要等を確認するため、パンフレット等の資料を用意しておいてもらう。

★広域センター等に他の支援センターがどんな調査をこれまで行っていたのか確認する。

★自治体や地域に関連するデータがないか確認する。

★自治体と一緒に定期的な調査を計画・実行する。

A2：障害者の芸術文化活動に関する相談事を解決する活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者の芸術文化活動に関する相談事に対応します。

〈a〉 支援センターの広報活動を行う

□ 支援センターを周知するための広報媒体を準備し、積極的に広報をする

（準備している媒体が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ ホームページやSNS

△ パンフレットやリーフレット

△ その他（　　）

〈b〉 多様な障害者の相談を受け付ける環境を整える

□ 障害特性に配慮し、障害者が安心して相談できる窓口を設置する

□ 様々な障害に対応できるよう、色々な通信手段で相談を受け付ける

（受け付けている通信手段が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 電話

△ FAX

△ パソコン（電子メール）

△ 訪問・対面

△ その他（　　）

〈c〉 相談内容の管理・共有に関する活動をする

□ 支援センターでは、相談内容が漏洩しないような配慮を行う

□ 必要に応じて相談内容は記録し、データベース化等して保管・活用する

□ データ化された相談内容を、相談者の同意とプライバシーを配慮の上で、団体内や他団体と共有している

□ ホームページやパンフレット等に相談事例を掲載する

〈d〉 相談の質・体制向上に関する活動をする

□ 相談員が1人で悩まず、支援センター内部で検討しながら対応できるように、複数の相談員を配置する

□ 弁護士や学芸員、舞台制作者等、専門家のアドバイスを受けたり紹介できる体制を整える

□ 相談の内容に応じて、関係機関の紹介を行う

チェックの合計数	個

この項目を効果的に実施するための工夫！（★は協働ポイント）

・相談を受け付けられる窓口の開設時間を利用者が分かりやすいところに明記する。

・どんな相談に対応できるかについて、利用者別に整理して情報を発信する。

・専門的な相談が来たときに、相談できる相手や専門家の情報を整理したり、定期的にアップデートできるようにしておく。

・つながった新しいリソース（専門家等）は支援センター内のリソースリスト等に入れて、他の相談員やスタッフと共有する。

★特に活動し始めのセンターは、すでに他の支援センターが活用している相談対応リストや、データベースから自団体の活動のヒントを得る。

★ユニークな相談事例や対応が困難であった事例は、他の支援センターや広域センターと連携し、ノウハウを蓄積していく。

A3：障害に配慮した芸術文化活動の情報を収集・発信し、届ける活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者が芸術文化活動に関する情報にアクセスできるよう、情報を収集・発信し届けます。

〈a〉 鑑賞機会についての情報収集・提供を行う

□ 芸術文化活動を行う様々な団体・施設から日常的に鑑賞機会についての情報を得る

□ 芸術文化活動に関する鑑賞機会について、様々に工夫した情報の発信を行う

（行っている工夫が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 支援センターのウェブサイトにイベントの情報を掲載する

△ 支援センターのウェブサイトに音声読み上げ対応等工夫をしたイベントの情報を掲載する

△ 平易な言葉を使用したり、漢字にルビを振る等工夫したパンフレット等を作成する

△ イベントやコンサート等の情報が掲載されたチラシやパンフレット等を障害者福祉施設、学校（特別支援学校・学級を含む）、文化施設等、様々な場所で設置・配布する

△ その他（　　）

〈b〉 参加・創造機会についての情報収集・提供を行う

□ 芸術文化活動を行う様々な団体・施設から日常的に参加・創造機会についての情報を得る

□ 芸術文化活動に関する参加・創造機会について、様々に工夫した情報の発信を行う

（行っている工夫が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 支援センターのウェブサイトにイベントの情報を掲載する

△ 支援センターのウェブサイトに音声読み上げ対応等工夫をしたイベントの情報を掲載する

△ 平易な言葉を使用したり、漢字にルビを振る等工夫したパンフレット等を作成する

△ イベントやコンサート等の情報が掲載されたチラシやパンフレット等を障害者福祉施設、学校（特別支援学校・学級を含む）、文化施設等、様々な場所で設置・配布する

△ その他（　　）

チェックの合計数　　個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

・鑑賞機会については、アクセシビリティに関する情報等積極的に取得し、発信する。

・毎年行われている大きな地域のイベントや、イベントが増えるシーズン等を把握し、広報活動のピークポイントを調整する。

★すでに所属していたり、アクティブに活動しているネットワークから情報を得る。

B領域　障害者が芸術文化活動に主体的に参加できる機会を増やすための支援

この領域は、障害者が作品を創造し、発表する機会の増加や、障害者の技術向上のための機会の増加や、障害者の芸術文化活動に対する社会的な認知を向上させるための活動内容を規定しています。

B1：障害者が作品を創造し発表する機会を増やすための活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者が作品を創造し、発表する機会を増やしていきます。

〈a〉 作品や芸術家の調査・発掘を行う

- □ 地域で見かけた作品（興味深いもの）をもとに、人づてに辿っていき、作品や芸術家を探す
- □ 気になる作品・芸術家には現地まで確認しに（会いに）いく
- □ 地域の展覧会や舞台をみてまわり、作品や芸術家に出会う可能性を広げる
- □ 障害者による作品や芸術文化活動の記録及び保存を行う

〈b〉 創作のための環境整備と発表機会の創出を行う

- □ 障害種別を問わず、どんな障害者でも参加可能な芸術文化活動の環境整備を支援する
- □ 記録及び保存している作品をアーティストや出演者等の同意を得た上で貸出・公開する
- □ 支援センターが自ら企画・運営し、展覧会や舞台公演等の機会を創出する
- □ 地域の団体が展覧会や舞台公演等の機会を創出するよう働きかけを行う

チェックの合計数　　個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

・支援センター内や関連施設でアトリエ等の創作できるスペースを設ける。

★地域で多様な創造機会を創出できるように、今までつながりの無かった（弱かった）場所・施設等でワークショップや研修等を行う。

B2：障害者の作品制作や表現の技術向上につながる機会を増やすための活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者の作品制作や表現の技術向上につながる機会を増やしていきます。

- □ 障害者のニーズに合わせ、芸術文化活動を学べる場等、適切な情報提供を行う
- □ 障害者のニーズに合わせ、多様な芸術文化活動の作品制作が可能な場を提供する用意ができている

（作品制作が可能な場を提供するための用意が、以下の△に1つ以上該当すれば□に✓をする）

△　美術作品を制作する場合、地域の中にある作品制作の選択肢（絵画、工芸、陶芸等）を把握する

△　舞台芸術作品を制作する場合、多様なジャンルの芸術家とのネットワークを構築する

△　その他（　　）

□　必要に応じて、障害者福祉施設や学校（特別支援学校・学級を含む）等に芸術文化活動支援の専門家の派遣・紹介を行う

チェックの合計数　　個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

・多様なニーズにセンターとして応えられるために、リソースや関係者のリストは整理し、情報は定期的にアップデートする（情報を属人的にしない）。

★地域でコンソーシアムや協議会等がある場合は、そこでリソースを共有したり、一緒にリソースリストを更新したりする。

B3：障害者の芸術文化活動に対する社会的認知を高めるための活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者の芸術文化活動に対する社会的認知が向上させる。

□　展覧会や舞台公演において、観客から作品の意見を聞く機会を設ける

（意見を聞く機会が、以下の△に1つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 観客に対してインタビューを行う

△ 観客に対してアンケートを行う

△ その他（　　）

□　インタビューやアンケートの情報をまとめ、障害者にフィードバックを行う

□　観客と障害者がコミュニケーションをとる機会を設ける

（コミュニケーションの機会が、以下の△に1つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 展覧会やイベントにあわせてアーティスト・トークを行う

△ 対話型鑑賞等のプログラムを行う

△ 参加型ワークショップを行う

△ その他（　　）

□　展覧会や舞台公演等を積極的に開催する

□　展覧会や舞台公演等において、専門家からの評価やコメントを得る仕組みを構築する

□ 担当の都道府県内において障害者の作品を売買する仕組みを構築する

□ 担当の都道府県内において障害者の作品をグッズ化する仕組みを構築する

□ 舞台芸術に関わる障害者の出演機会の増加や、作品の媒体化（CD・DVD・Blu-ray・YouTube等）が行われるよう支援する

□ 様々なメディアを活用し、障害者の芸術文化活動を紹介する

（活用しているメディアが、以下の△に1つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 新聞・雑誌（オンラインも含む）等の活字メディア

△ テレビ・ラジオ等の放送メディア

△ その他（　　）

チェックの合計数	個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

- 関係する団体や所属するコミュニティ等で広く情報が行き渡るメディアやコミュニケーションの媒体を見つけ、情報を発信する。
- 新聞社や広報媒体の担当者と日ごろからコミュニケーションをとる。
- 大きなイベントを企画する場合等はプレスリリースを出す。
- 使用するメディアのメインターゲットにあわせた情報発信をする。

★グッズ・作品売買については仕組みを構築した支援センター等からノウハウを学ぶ。

★支援センターの意図や事業の目的を理解してくれるデザイナーと連携し、コミュニケーションに活かす。

★自治体と協働し、イベント等の情報を発信する。

C領域　障害者の芸術文化活動に従事する人・団体（以下、関係者）がより質の高い活動を行うための取り組み

この領域は、障害者福祉施設や文化施設等の関係者が、質の高い活動を行うために、必要な知識やスキル等を身につけるための活動内容を規定しています。

C1：関係者の必要な知識やスキルを向上し、地域の団体が、組織・事業として障害者の芸術文化活動に取り組めるようになる活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者を支援する方々や関係者が必要な知識やスキルを向上し、地域で障害者の芸術文化活動を組織・事業として支える人を支援します。

〈a〉 関係者の障害者の芸術文化活動に関する知識・スキルの向上を行う

□ 関係者を対象とした研修会・勉強会を企画・主催する

□ 関係者からの要請や依頼に応じて、障害者福祉施設等を訪問して研修会・勉強会を行う

□ 研修に参加した関係者に対して継続的なフォローアップ支援を行う

□ 地域の団体の成功事例・失敗事例やノウハウ等を蓄積し、発信する

□ 障害者と関係者がともに芸術文化活動の企画・運営を行う機会を設ける

〈b〉 地域の団体が障害者の芸術文化活動を組織の事業として行えるようになるための支援を行う

□ 障害者福祉施設等の施設長や管理者へ障害者の芸術文化活動の魅力やもたらした変化について説明を行う

□ 障害者福祉施設等の施設長や管理者が障害者の芸術文化活動を鑑賞したり一緒に体験できる機会を設ける

□ 障害者芸術文化活動を行う組織・団体に組織のマネジメント力を強化するプログラムを提供する

□ 障害者福祉施設や文化施設等の意思決定者を、すでに障害者の芸術文化活動支援を行っている団体同士のネットワークやコミュニティへつなげる

チェックの合計数	個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

- 研修実施にあたっては、具体的にどんな変化を参加者にもたらしたいか、会得して欲しいか、目的は何か等を明確にした上で研修を設計し、期待した変化や成長があったかについて必ずアンケートを取る。
- 研修や講師派遣の依頼を受けたときも、可能な限り目的や研修のゴールを明確にする。
- スタッフや管理者、当事者、関係者がフラットに学んだり、体験できる環境をつくる。

★スタッフの知識やノウハウの向上で価値のある研修プログラムを広域センターや連携事務局を通して、支援センター同士で共有する。

C2：（障害者の芸術文化活動を支援する）多様な主体のネットワークを強化する活動

・以下に記載する活動に取り組み、障害者の芸術文化活動を支える多様な主体によるネットワークを強化します。

〈a〉 連携・協力するためのネットワークづくりを行う

□ 様々な機関・専門家が参加した協力委員会等の協力体制を整えている

（参加する多様な機関・専門家が、以下の△に5つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 障害者の芸術文化活動の実践者

△ 学校（特別支援学校・学級を含む）等教育関係者

△ 都道府県の職員（福祉及び芸術担当）

△ 市区町村の職員（福祉及び芸術担当）

△ 学芸員や舞台制作者等の芸術分野の専門家

△ 弁護士等、法律分野の専門家

△ その他（　　）

□ 協力者と委員は定期的に集まり情報共有等を行っている

〈b〉ネットワークを生かした取り組みを行っているか

□ 全国の支援センター、広域センター、連携事務局とのネットワークを生かした事業を行う

□ 独自のネットワーク（アート系コンソーシアム、福祉関係ネットワーク、協議会等）を生かした事業を行う

□ 障害者の芸術文化活動支援に関わる都道府県の担当部局や担当者と定期的に情報交換を行う

□ 障害者の芸術文化活動支援に関わる市区町村の担当部局や担当者と定期的に情報交換を行う

□ 著作権等の権利保護については、必要に応じて、弁護士等の法律の専門家を活用する

□ 芸術文化活動支援については、必要に応じて、学芸員、舞台制作者、研究者等の専門家を活用する

チェックの合計数　　個

この項目を効果的に実施するための工夫！（★は協働ポイント）

・支援センターが委員会等を主催するときは、その目的や意義を明確にして会合を進める。

・個々のネットワークに支援センターとして関わる場合も、その目的や意義を明確にする。

・定期的（余裕をもって）委員会やミーティング等をセットする。

★ネットワークの関係者と本ガイドを参照して一緒に普及支援事業の計画を作成し、計画中・計画終了後に一緒に振り返りを行う。

★支援センターとして、どれくらいつながりが増えたか、どんな主体とつながったかをモニタリングする。

D領域　地域に障害者の芸術文化活動を応援する人を増やすための取り組み

この領域は、地域住民やボランティア等、地域に障害者の芸術文化活動を応援する人を増やすための取り組みとして、場作り等の機会創出や情報発信に関する具体的な活動内容を規定しています。

D1：地域住民が芸術文化活動を通して障害者と交流できる場をつくる活動

・以下に記載する活動に取り組み、地域住民が芸術文化活動を通して障害者と交流できる場を作ります。

□ 支援センターとして、地域住民が障害者の芸術文化活動に触れられる多様な機会をつくる

（地域住民が障害者の芸術文化活動に触れられる機会が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 展覧会・美術展

△ 舞台公演

△ 障害者芸術文化活動に関する講演会・シンポジウム

△ その他（　　）

□ 地域住民が障害者の芸術文化活動を通して障害者と直接交流・関わる場をつくる

（地域住民が障害者の芸術文化活動を通して直接関わる場が、以下の△に2つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 地域住民も参加できるイベント・ワークショップの開催

△ 舞台公演前後のパブリックトークの開催

△ イベント内のアーティスト・トークの開催

△ その他（　　）

□ 地域のイベント（祭り等）に障害者の作品等が参加できるように働きかけを行う

□ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）等を訪問し、児童・学生が障害者の芸術文化活動に触れられる機会をつくる

□ 障害者と様々な分野の専門家（芸術家等）が共同して作品制作に取り組めるよう支援する

□ 地域住民の中で障害者の芸術文化活動に興味のある人から問い合わせや相談を受け付ける

チェックの合計数　　個

この項目を効果的に実施するための工夫！(★は協働ポイント)

・イベントの日時や時間、場所等ターゲットにしたい人たちの生活パターンや動線を事前に検討する。

・参加者にアンケートを取り、感じたことやフィードバックをもらう機会をつくる。
・応援する人向けのメニューを整理しておく（ボランティアの機会、研修やワークショップファシリテーターの機会、鑑賞機会、寄付の機会等）

D2：地域住民の障害者の芸術文化活動に関する関心が高まるよう情報を発信する活動

・以下に記載する活動に取り組み、地域住民の障害者の芸術文化活動に関する関心が高まるよう情報を発信する。

□ 支援センターの役割について、地域住民に知ってもらうためのリーフレットやウェブサイトを準備し、広報を行う

□ 支援センターが実施する障害者の芸術文化活動に関するイベント等のチラシ等を作成し、地域住民向けに配布する

（配布の場所が、以下の△に3つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 障害者福祉施設
△ 文化施設（美術館、博物館、劇場、映画館）
△ 保育園、幼稚園、学校（特別支援学校・学級を含む）
△ カフェ、レストラン、バー
△ 市役所、図書館
△ その他（　　）

□ 地域における障害者の芸術文化活動の情報（イベントや取り組み）を、地域住民向けに公開・発信する

（発信の方法が、以下の△に3つ以上該当すれば□に✓をする）

△ 新聞
△ 区報や市報等の行政紙
△ コミュニティ紙、フリーマガジン
△ ソーシャルメディア
△ 支援センターのウェブサイト
△ 支援センターのメーリングリスト
△ 関係団体のメーリングリスト
△ その他（　　）

□ 地域住民が継続的に障害者の芸術文化活動に触れたり学んだりできるよう、アーカイブ（記録及び保存）を整理・公開する

チェックの合計数	個

この項目を効果的に実施するための工夫！（★は協働ポイント）

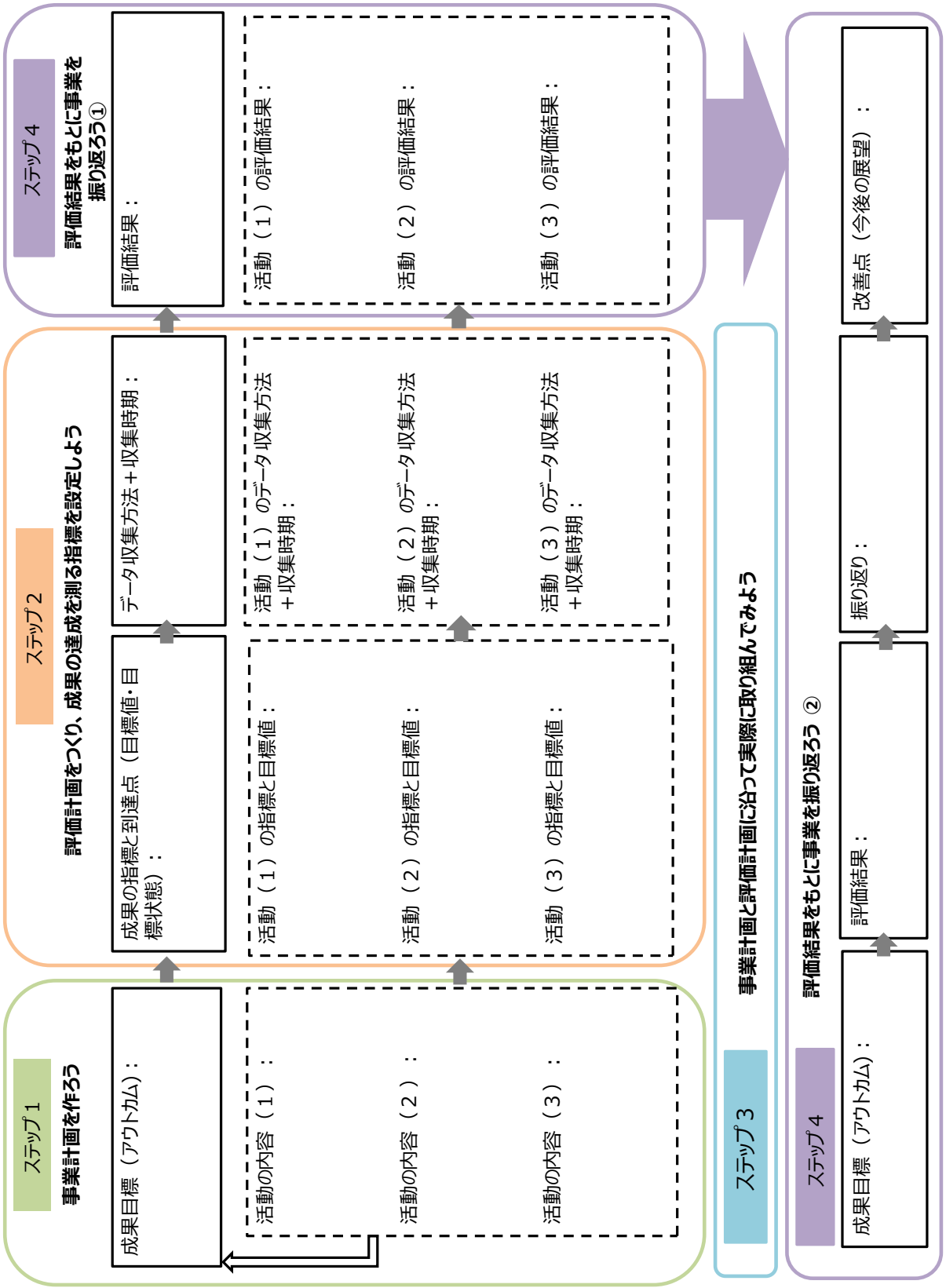
- 地域に根ざした活動やイベント等で情報を発信する。
- 地域の人々にとって、支援センターをどう活用できるのか、どんな相談に乗ってもらえるのかを具体的に表現する。
- チラシやパンフレット等については、配布した場所は枚数をトラックしたり、ポスター等も掲示した場所を記録し、地域住民の反応等を記録しておく。

巻末資料２：支援センターの活動のコツチェックリスト　レーティング（評点）基準

	評点・アンカーポイント				
項目	1点	2点	3点	4点	5点
A1	示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～5要素を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たす	示された要素のうち6要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも✓が入っている	示された要素のうち7要素以上を満たし、かつ<a><b><c><d>のいずれにも2つ以上の✓が入っている
A2	示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５～６要素を満たす	示された要素のうち７～9要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
A3	示された要素のいずれも満たさない	示された要素のうち１要素を満たす	示された要素のうち２要素を満たす	示された要素のうち３要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
B1	示された要素のいずれも満たさない、あるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５～６要素を満たす	示された要素のうち７要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
B2		示されたいずれの要素も満たさない	示された要素のうち1要素を満たす	示された要素のうち2要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
B3	示されたいずれの要素も満たさないあるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５～６要素を満たす	示された要素のうち７～８要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
C1	示されたいずれの要素も満たさない、あるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５～６要素を満たす	示された要素のうち７~8要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
C2	示されたいずれの要素も満たさないあるいは示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５～６要素を満たす	示された要素のうち７要素を満たす	示された要素のすべてを満たす
D1	示されたいずれの要素も満たさない	示された要素のうち１～２要素を満たす	示された要素のうち３～４要素を満たす	示された要素のうち５要素を満たす	示されたすべての要素を満たす
D2	示されたいずれの要素も満たさない	示された要素のうち１要素を満たす	示された要素のうち２要素を満たす	示された要素のうち３要素を満たす	示されたすべての要素を満たす

巻末資料３：ステップを確認・整理するためのワークシート

本ガイドで説明したステップ1～4に内容を以下のワークシートにまとめることができます。



ワークシートの使い方

① ワークシートは成果目標1つにつき、1シート使います。

② 1つの成果目標に紐づく活動は、各支援センターによって異なると思いますので、必ずしもシートの例のように3つとは限りません。1つの成果目標につき1つの場合もあれば、4つ以上になる場合もあるかと思いますので、枠が足りなければ適宜足してご活用下さい。

③ ガイドの各ステップのプロセスや注意事項に沿ってシートを埋めていきます。

④ まずはステップ1「事業計画を作ろう」に取り組み、「成果目標（アウトカム）」とその達成に紐づく「活動の内容」を記載します（シートの黄緑色の枠内）。

⑤ 次にステップ2「評価計画をつくり、成果の達成を測る指標を設定しよう」に取り組みます（シートのオレンジ色の枠内）。まず、上段の「成果の指標と到達点（目標値・目標状態）」を記載しましょう。次に下段の「活動の指標と目標値」を記載します。その後、「成果の指標と到達点（目標値・目標状態）」と「活動の指標と目標値」に続く「データ収集方法と収集時期」を記載します。

⑥ ステップ3は、ステップ1とステップ2に記載した内容をもとに「事業計画と評価計画に沿って実際に取り組んでみよう」のステップとなりますので、本シートには記載する内容はありません（水色の枠内）。ただし、事業計画の変更を行った場合は、シートに予め記載した内容も修正・変更しましょう。その際、必然的に評価計画も連動して変更しますので、評価計画の修正・変更も忘れずに。

⑦ ステップ4「評価結果をもとに事業を振り返ろう」では、まず「①評価結果を確認する」で、ステップ2で設定した指標やデータ収集の方法をもとに集まった情報をもとに、成果目標が達成できたか、活動目標が達成できたかを評価し、評価結果を記入します（右側の紫色の枠内）。

⑧ 次に「②事業の良かった点（達成できた成果）＆改善点（今後の展望）を考える」として、評価結果をもとに、事業の良かった点等を振り返り、今後に向けて改善点等を整理します（下の紫色の枠内）。

⑨ シートにまとめられた情報は、必要に応じて報告書の作成や、次年度の事業計画の作成にお役立て下さい（自治体等から求められる事業計画書のフォーマットの中には、皆さんに委託したい事業内容（例：相談事業、普及啓発事業、人材育成事業）がすでに明記されているようなものもあるかもしれません。その場合は、本ワークシートを使って情報を整理した上で、活動のレベルで当該事業に当てはまる活動を探し、その実施目的であるアウトカムについて併せて記載することで、実際の業務と乖離することなく本ワークシートを活用いただけます。例えば「相談事業」であれば、「●●県内の障害者の▲▲という課題を解決するために、■■に関する相談事業をxx程度実施します」というように成果目標（活動によって達成したいアウトカム）と、その具体的な方法を表記することができます）。

巻末資料４：用語集

アウトカム	活動が行われることにより、達成が目指される成果のこと。社会や地域、人々に起こる変化の状態像を示すため、基本的には受益者や事業・活動の対象が主語となることが多い。本ガイドでは、「成果目標」と同義としている。
アウトプット	活動の直接的な結果のこと。アウトプットを出すのは、事業・活動を実施する主体であるため、原則的に主語は自身や自団体（本ガイドでは支援センター）となる。
KPI（Key Performance Indicator）	重要業績指標と訳され、目標達成度合いを評価するための評価指標を指す。特に目標達成に向けた《プロセス》における達成度を把握するために用いられることが多い。一方、似た用語としてKGI（Key Goal Indicator）がある。KGIは「重要目標達成指標」と訳されるもので「最終目標」の評価に用いられる（現状ではこれらの明確な区分がなく使われている場合も多く、最終目標をKPIと表現している場合も多いが、本ガイドで提示している評価の枠組みではKPIが成果目標になることは原則的にない）。
観察（参与観察・非参与観察）	調査対象者について、視覚や聴覚等を用いて記録・分析すること。参与観察とは調査対象者と生活や経験等をともにしながら、対象者の視点から出来事や社会構造を理解しようとする方法を意味し、非参与観察とは対象者の行動に調査者が全く影響を与えないようにして、対象者が表現するありのままを客観的に観察する方法を意味する。
協働型評価	多様なステークホルダーの評価活動への参加と評価ワークショップの実施を重要視する評価方法。具体的な例としては、様々な協働相手が参加する評価ワークショップを通してロジックモデルの作成やアウトカム・活動の指標の設定・検討をともに行う。
効果的援助要素（活動のコツ）	効果的援助要素とは成果（アウトカム）の達成に貢献するような活動の取り組み方に関する要素を規定したものを指す。本ガイドでは効果的援助要素を「活動のコツ」と呼称し、それをリスト化したものを「活動のコツチェックリスト」としている。
最終アウトカム（最終目標）	事業が最終的に達成を目指す目標のこと。最終アウトカム（最終目標）は必ずしも当該事業のみの影響によってのみ達成が目指されるわけではなく、その達成にはその他の多くの要因も関連しているのが一般的である。
事業計画	事業の最終アウトカム（最終目標）や中間アウトカム（戦略目的）、直接アウトカム（直接的な成果）や、そのために必要となる具体的な活動、そして当該活動の実施時期等を記載した計画のこと。

指標（成果指標・評価指標）	状況や物事に価値をつける際の基準となる要素のこと。状況の変化を見出したり、変化の程度を見定めたりするために用いる。
社会調査	客観的な方法によってデータを収集、処理、記述、および分析する過程を通じ、社会事象を定量的（量的）、または定性的（質的）に認識すること。
中間アウトカム（戦略目的）	事業によって達成が目指される目標のこと。最終アウトカム（最終目標）が必ずしも「事業の実施」によってのみ達成されるものではないのに比べて、中間アウトカム（戦略目的）は事業が寄与する部分が大きい目標となる。そのため事業の戦略に関しての目的という意味で「戦略目的」ともいう。
直接アウトカム（直接的な成果）	活動による直接的な成果（アウトカム）を意味する。ロジックモデルに位置付けられた活動は主にこの直接アウトカム（直接的な成果）を達成するために規定されている。
パネル調査・トレンド調査	パネル調査とは同一対象を追跡して行う方法（あるプログラムの被験者を実施前・実施後で調査する等）であり、トレンド調査とは対象者は変化するが集団のくくりは常に同じである方法を意味する（渋谷を訪れる10代の若者のファッションを調査する等）。
評価計画	プログラムの成果（アウトカム）や活動の結果（アウトプット）を測定するための指標を記すとともに、その達成目標も記載し、「誰が」「いつ」「どのようにして」それらのデータを収集して、プログラムの成否を判断するのかを記載した計画。
評価結果	評価計画による評価の結果を意味する。評価は「事実特定＋価値判断」と定義され、そのため評価結果には「そのため十分な成果を達成したと判断する（あるいは、成果の達成状況は十分ではないと判断する）」等といった価値判断が伴う。そのため、「展示会の参加者は〇人だった」といった《事実》のみの記載（価値判断が伴わない記載）は「評価結果」とはいえないため、注意が必要である。
ランダムサンプリング（無作為抽出法）	調査対象をある母集団から無作為（ランダム）に標本抽出（サンプリング）する方法。
ロジックモデル	事業の設計図・戦略図とも呼ばれるもので、プログラムが何を目指すべきか、そのためにどのような活動を実施すべきか、さらに活動を実施するためにどのような資源（インプット）を準備すればいいか、等を体系的に図式化して整理するためのツールのこと。

平成30年度　厚生労働省障害者総合福祉推進事業

障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイドライン作成事業

【検討委員】（五十音順）

大澤　寅雄　　ニッセイ基礎研究所

大塚　晃　　上智大学　総合人間科学部　社会福祉学科　教授

重光　豊　　特定非営利活動法人障碍者芸術推進研究機構　天才アートKYOTO副理事長

新藤　健太　　群馬医療福祉大学　社会福祉学部　助教

長津　結一郎　九州大学　大学院芸術工学研究員　コミュニケーションデザイン科学部門　助教

西村　陽平　　日本女子大学　名誉教授

保坂　健二朗　独立行政法人国立美術館　東京国立近代美術館主任研究員

松下　功　　東京藝術大学　副学長　演奏藝術センター　教授

源　由理子　　明治大学　専門職大学院ガバナンス研究科　教授（委員長）

吉野　さつき　愛知大学　文学部　メディア芸術専攻　教授

【執筆分担】

はじめに：清水潤子、鴨崎貴泰

１：清水潤子、新藤健太、鴨崎貴泰

２：落合千華、新藤健太、清水潤子

３：清水潤子、新藤健太、鴨崎貴泰

４：新藤健太、清水潤子、鴨崎貴泰

おわりに：清水潤子、鴨崎貴泰

【編集者】

清水潤子、新藤健太、落合千華、鴨崎貴泰

令和２年度厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業

障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイド
―より良い協働と事業成果を高めるためのヒント集―
改訂版作成プロジェクト

【執筆分担】

はじめに：清水潤子

改訂版作成にあたって：清水潤子

１：清水潤子、新藤健太

２：清水潤子

３：新藤健太、清水潤子

４：清水潤子

５：新藤健太、清水潤子

６：新藤健太、清水潤子

７：清水潤子

８：清水潤子

おわりに：清水潤子

【編集者】

松井裕紀（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部）

山口有子（社会福祉法人グロー法人本部企画事業部）

清水潤子（特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会）

新藤健太（群馬医療福祉大学）

【協力】

アール・ブリュットインフォメーション&サポートセンター（アイサ）

福岡県障害者芸術文化活動支援センターFACT

令和２年度　厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業

障害者芸術文化活動普及支援事業評価ガイド
―より良い協働と事業成果を高めるためのヒント集―

発行日　2021年3月31日
企画　令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局　社会福祉法人　グロー
発行者・事務局　特定非営利活動法人　日本ファンドレイジング協会
〒105-0004 東京都港区新橋5-7-12 ひのき屋ビル7F
TEL 03-6809-2590 / FAX 03-6809-2591